

# 福島原発事故後の親子の生活と健康 に関する調査報告書（2017年）

このたびは、「福島子ども健康プロジェクト」が2013年1月から毎年お正月に実施しております「福島原発事故後の親子の生活と健康に関する調査」にご協力いただき、誠にありがとうございました。おかげ様で、第5回調査の報告書が完成しましたのでお送りいたします。

この報告書は、全体的な傾向を把握するために主要な項目を中心に調査結果を要約したものです。さらに詳細な分析は、下記のホームページに掲載された論文などをご参照ください。

「福島子ども健康プロジェクト」は、今後も福島県中通り9市町村の親子の生活と健康状態を定期的に記録し、広く社会に伝えるとともに、親子が健やかに生活できる環境を整えるのに必要な施策につなげていきたいと考えています。

今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

2017年6月吉日

## 【お問い合わせ先】

福島子ども健康プロジェクト

〒470-0393 愛知県豊田市貝津町床立101 中京大学 成元哲研究室

電話：0565-46-6516

e-mail：sungwonc@sass.chukyo-u.ac.jp

ホームページ：https://fukushima-child-health.jimdo.com/

\* 本研究は科学研究費助成事業（15H01971、25460826、15H01850）の研究成果です。

## ★ご覧いただくにあたっての注意点

- ① 調査票は、現在も調査対象者からご送付いただいております。今回の報告書は、4月3日までに到着した調査票を対象としました。そのため、この報告書の結果は895票を集計したものです。
- ② 各グラフの数値は、特にことわりがない限り、回答者全体（895名）に対する割合です。ただし、小数点第2位以下は四捨五入しています。また、非常に小さい数値は表示していませんので、合計は必ずしも100%にはなりません。
- ③ 本調査データを引用される場合は事前に「福島子ども健康プロジェクト」までご連絡ください。

# 1 調査の回答状況

## 1.1 第4回調査の9割近くが回答

この調査は、福島県中通り9市町村（福島市、桑折町、国見町、伊達市、郡山市、二本松市、大玉村、本宮市、三春町）の2008年度出生児6191名（生年月日が2008年4月2日から2009年4月1日までのお子さん）のうち、2016年の第4回調査の回答者（1021名）を主な対象としています（合計1026名）。今回の第5回調査は、2017年4月3日の時点で、895名（回答率87.2%）から回答をいただきました。

地区	第1回調査(2013年)			第2回調査(2014年)			第3回調査(2015年)			第4回調査(2016年)			第5回調査(2017年)		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
福島市	2137	883	41.3	883	526	59.5	525	379	72.1	410	328	79.8	327	285	87.2
桑折町	70	34	48.6	34	22	64.7	22	19	86.4	20	14	65.0	14	12	85.7
国見町	63	27	42.9	27	13	48.1	13	11	84.6	12	11	91.7	11	9	81.8
伊達市	404	175	43.3	175	118	67.4	118	89	74.6	94	75	78.7	79	66	83.5
郡山市	2644	1076	40.7	1076	629	58.5	629	476	75.7	514	390	75.7	390	345	88.5
二本松市	397	176	44.3	176	111	63.1	111	76	68.5	80	72	88.8	72	61	84.7
大玉村	81	44	54.3	44	27	61.4	27	21	77.8	22	20	90.9	20	15	75.0
本宮市	290	125	43.1	125	82	65.6	82	60	72.0	62	48	77.4	48	45	93.8
三春町	105	34	32.4	34	15	44.1	15	10	66.7	12	10	83.3	10	8	80.0
その他*		54		54	63		63	68		71	53	73.2	55	49	89.1
計	<b>6191</b>	<b>2611</b>	<b>42.2</b>	<b>2628</b>	<b>1584</b>	<b>60.3</b>	<b>1605</b>	<b>1205</b>	<b>75.2</b>	<b>1297</b>	<b>1015</b>	<b>78.3</b>	<b>1026</b>	<b>895</b>	<b>87.2</b>
		<b>2628</b>	<b>42.4</b>		<b>1606</b>	<b>61.1</b>		<b>1209</b>	<b>75.3</b>		<b>1021</b>	<b>78.7</b>			

表 1-1 地区ごとの回答状況

A 調査対象者数 B 回答数 C 回答率（%）

\*B,Cの計の上段は各報告書作成時点の数、下段は2017年4月3日時点での数です。

\*「その他」は調査対象地域の9市町村の住民基本台帳に2012年10月から12月までに記載されていた方で、それぞれの調査時点で「9市町村外」に転居された方の人数です。

\*第2回調査（2014年）と第3回調査（2015年）において、「その他」の回答数が対象者数を上回っています。これは、それぞれ前回の調査票に記入された住所に送付しましたが、転居などで「9市町村外」に移動した場合、「その他」に分類されるためです。

\*第4回調査の対象者数が第3回調査の回答数を上回っています。これは、第4回調査は2015年11月末時点での第3回調査回答者（1207名）に加えて、第1回調査協力者で第3回調査未回答者の中から再協力者（90名）を加えたためです。

\*第5回調査は、第4回調査の回答者（1021名）に加えて、第4回調査には回答していないが、住所変更などのお便りをくださった方（5名）を含めて1026名を対象としています。

## 2 子どもの生活

### 2.1 子どもの「外遊び」時間の回復傾向が続く

「外遊び」の時間については、年々1時間を超えて遊ぶ割合が増えています。

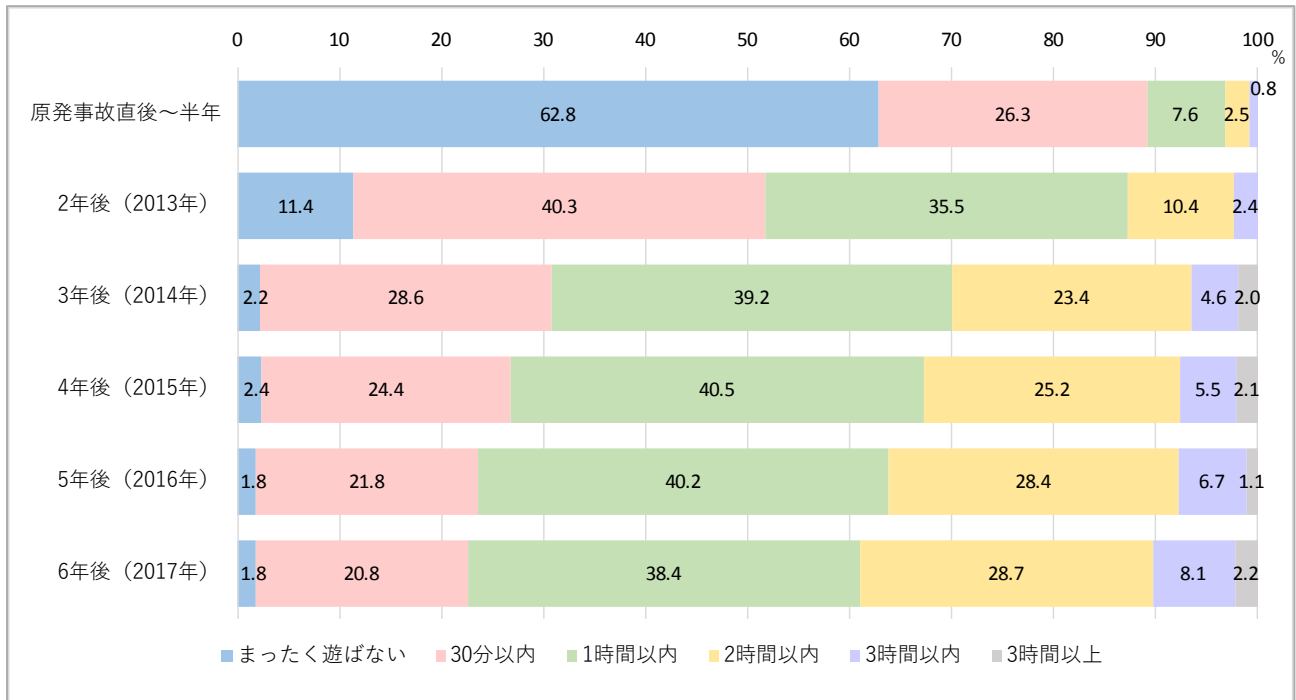


図 2-1 外遊びの時間

### 2.2 「テレビ・インターネット」を長時間視聴する子どもが若干増加

「テレビ・インターネット」をみて過ごす時間は、約8割が1時間を超えていることがわかりました。昨年（2016年）に比べ、「2時間以上」の割合が増加しており、長時間視聴する子どもが若干増加しているようです。

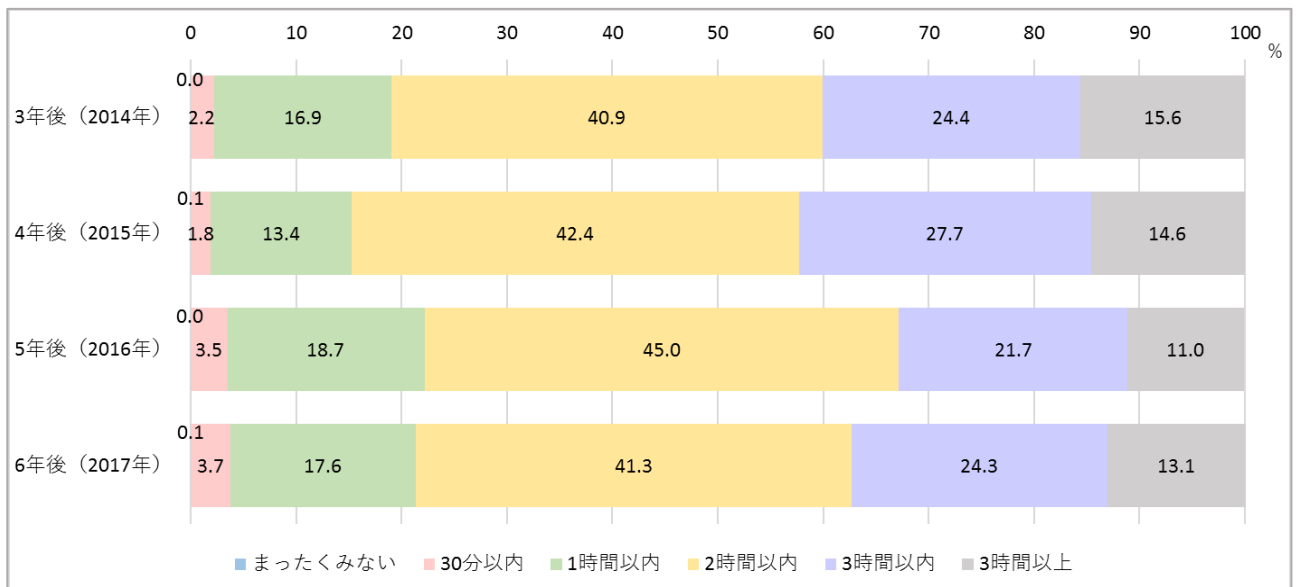


図 2-2 テレビ・インターネットの時間

### 2.3 昨年に比べ、おけいこ・習い事をしているお子さんの割合が増加

昨年同様、「水泳やスポーツクラブ」に通っているお子さんが約半数いることがわかりました。また、ほとんどのおけいこ・習い事において昨年より割合が高くなり、多くのお子さんが何らかのおけいこ・習い事をはじめたことがわかりました。

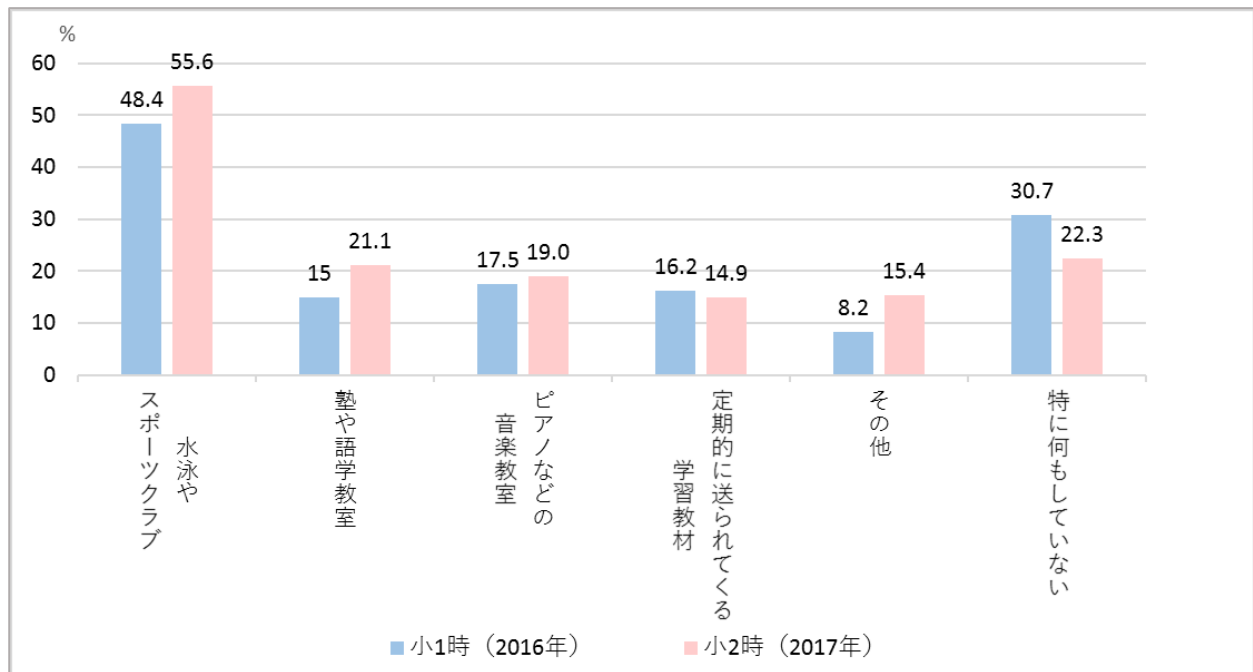


図 2-3 子どものおけいこ・習い事

### 2.4 昨年に比べ、「お子さんと遊ぶ機会」が激減

昨年と比べ、「ほぼ毎日」「お子さんと遊ぶ機会」が激減していることがわかりました。小2になり、おけいこや習い事、子どもだけの遊びなど、お子さんのライフスタイルが変化し、親と遊ぶ機会が少なくなっているのかもしれませんが。

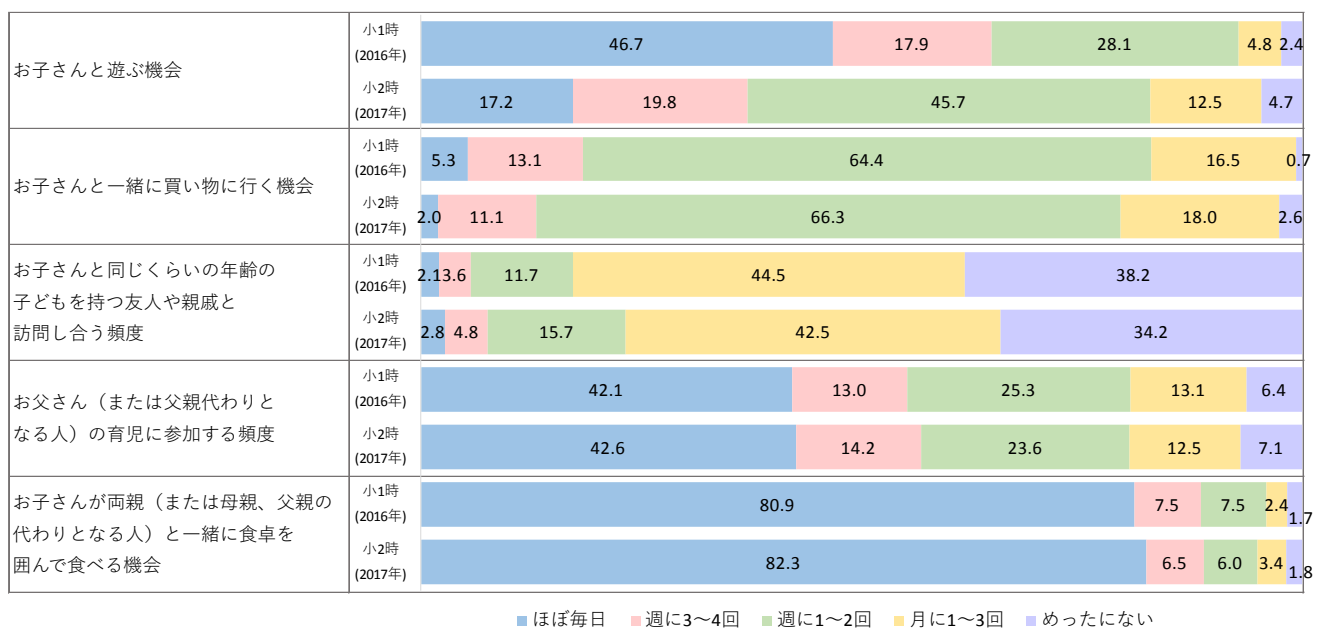


図 2-4 子どもと一緒に過ごす機会

### 3 子どもの発達と健康

#### 3.1 子どもの適応と精神的健康は年々、支援の必要性が低くなっている

子どもの適応と精神的健康について、国際的に広く利用されているSDQ日本語版を使って評価しています。SDQ日本語版は「情緒」、「行為」、「多動・不注意」、「仲間関係」、「向社会性」の5領域からとらえます。「情緒」は抑うつや不安など情緒の問題、「行為」は反抗挑戦性や反社会的行動、「多動・不注意」は不注意や集中力の欠如、「仲間関係」は友人からの孤立や不人気など、「向社会性」は協調性や共感性を、それぞれ意味します。「向社会性」のみ点数が低いほど、それ以外の項目は点数が高いほど、支援の必要性が高いことを示します。

図3-1は、これまでの経年変化とMoriwaki Aらの全国の小学1年から3年生9,968名を対象とした調査結果（赤）<sup>\*1</sup>を示しています。「向社会性」を除くほとんどの領域において、学年が進むにつれ、支援の必要性が低下していることがわかります。全国の小学1年から3年生の結果と比較すると、「行為」において支援の必要性が高いという結果が示されました。ただ、各項目において一般的に学年が進むにつれ、支援の必要性が低くなることが報告されています。

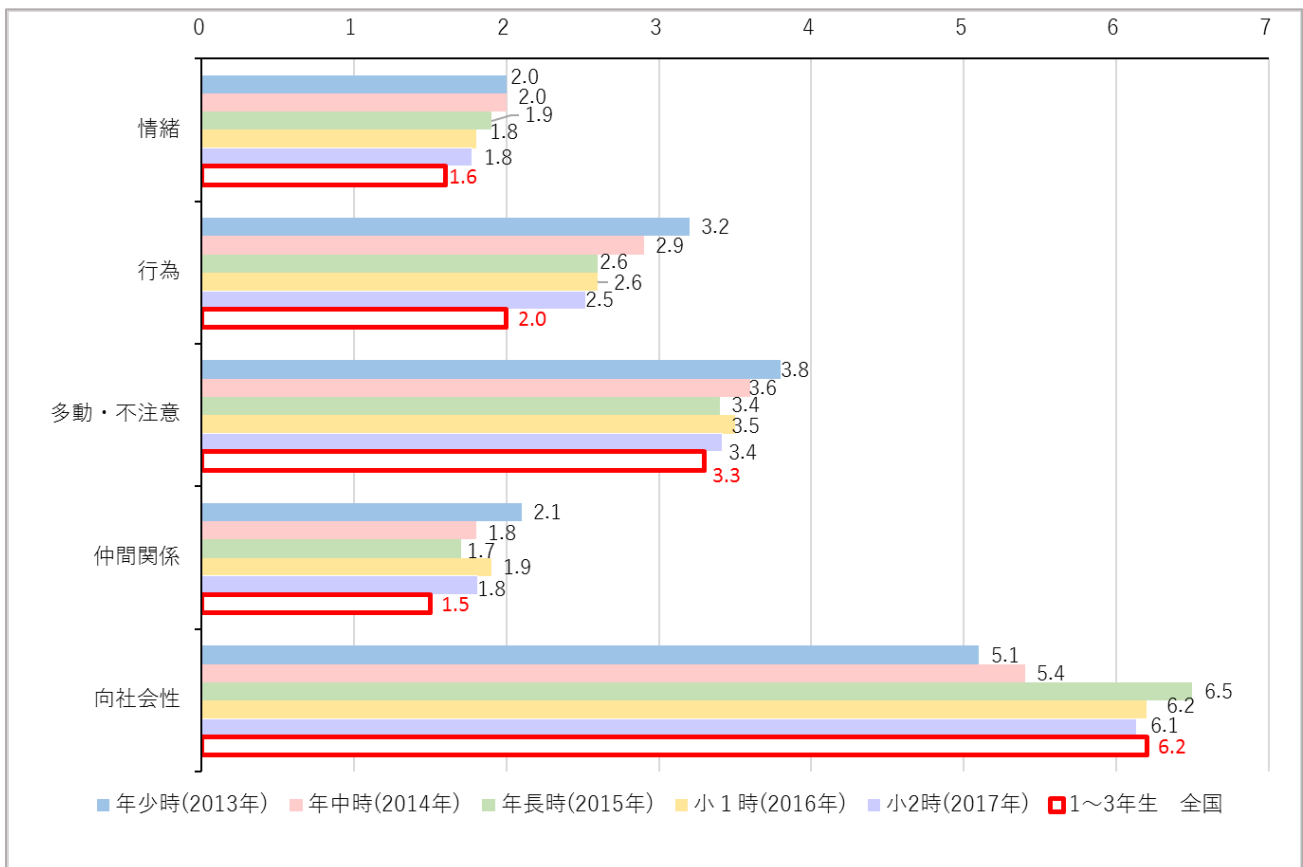


図 3-1 SDQ 得点

\*1 Moriwaki A and Kamio Y, 2014, Normative data and psychometric properties of the strengths and difficulties questionnaire among Japanese school-aged children, *Child and Adolescent Psychiatry and Mental Health*,21;8(1):1. doi: 10.1186/1753-2000-8-1.

### 3.2 SDQ 総合得点は、女子は年々「正常」が増加、男子は入学以降「正常」が減少

SDQ の 5 領域「情緒」、「行為」、「多動・不注意」、「仲間関係」、「向社会性行動」のうち、「向社会性」以外の 4 領域の点数を合計したものを SDQ 総合得点といいます。SDQ 総合得点は、その得点に応じて「正常」「境界」「臨床」に分けられます。図 3-2 は、SDQ 総合得点の経年変化を男女別に示したものです。女子では、年々「正常」が増加していることがわかります。前掲の Moriwaki A らの全国調査と比較しても、「正常」の割合が高いことがわかりました。一方、男子は、小学校入学以降、「正常」が減少しており、全国調査と比較して 10%以上の差があることがわかりました。

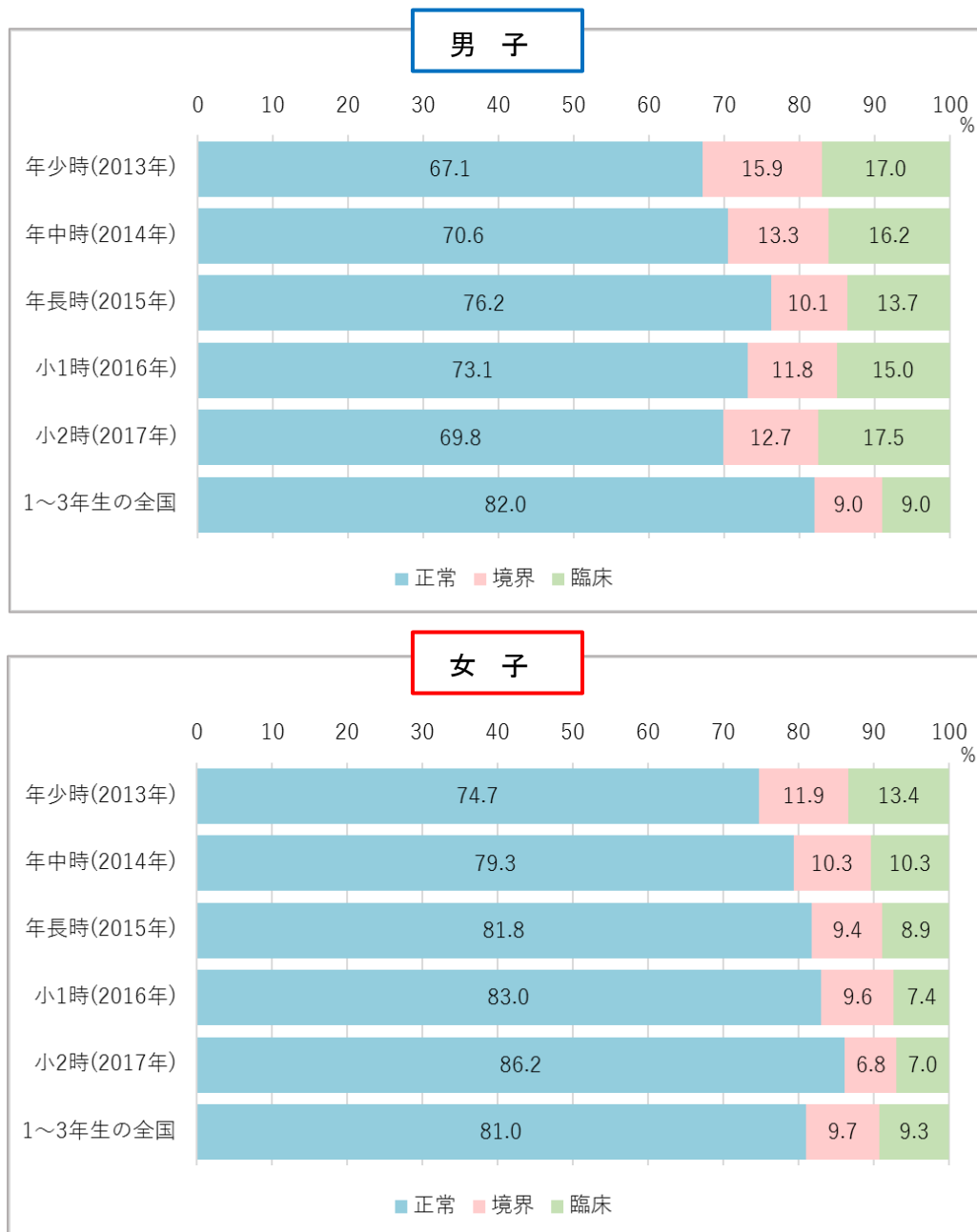


図 3-2 性別ごとの SDQ 総合得点

### 3.3 良好な健康状態が続いている

健康状態が「良い」「まあまあ良い」を合わせて約97%と良好な状態が続いています。

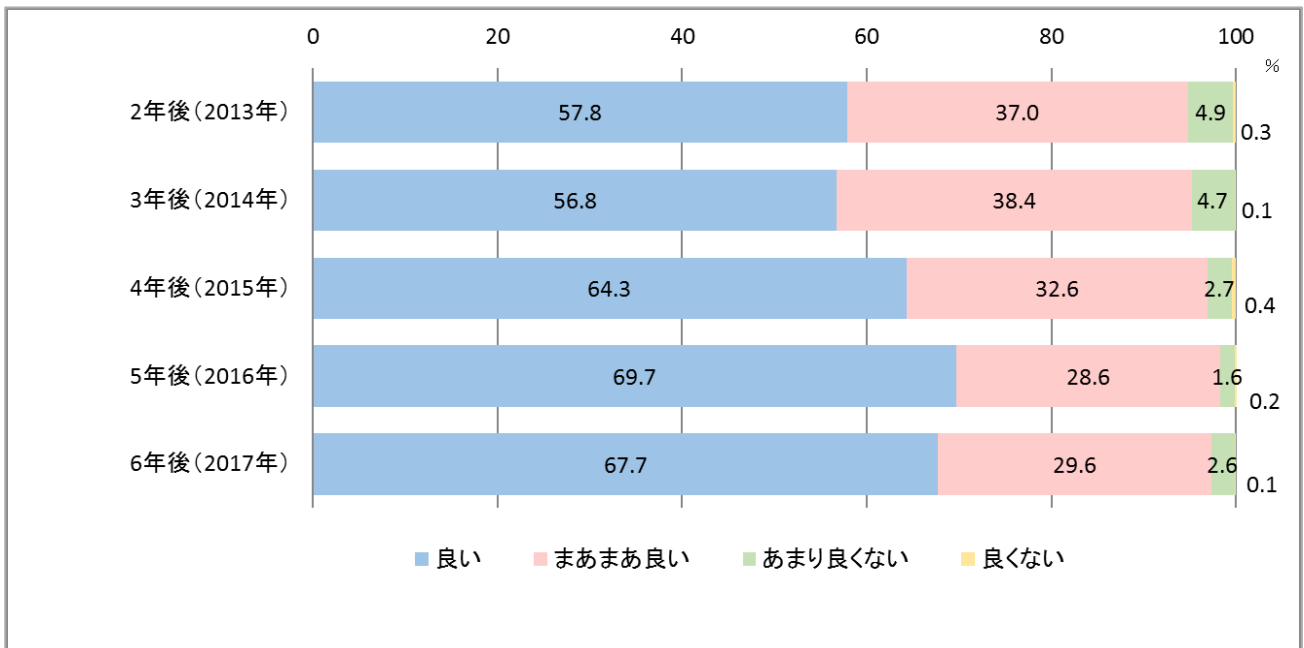


図 3-3 子どもの健康状態

### 3.4 子どもの症状のうち、「頭痛」だけが年々増加傾向にある

身体症状は、ほとんどの項目で減少、あるいは横ばい傾向にありますが、「頭痛」に関しては、年々増加しています。

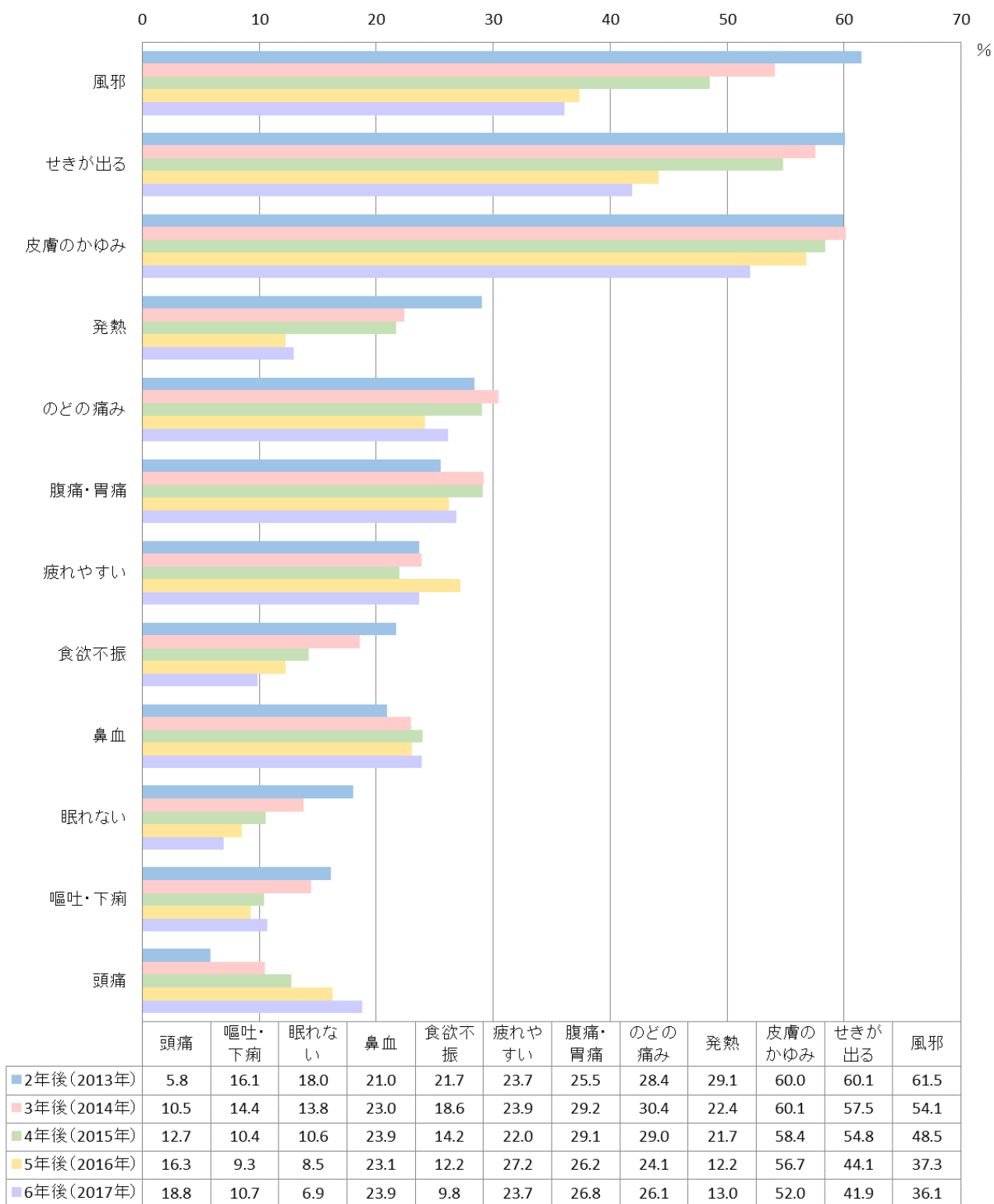


図 3-4 直近半年間での子どもの症状

\* 「よくある」+「ときどきある」の割合



## 4 母親の心身の健康

### 4.1 母親の健康状態もおおむね良好

母親の健康状態について「良い」と「まあまあ良い」を合計した割合は、2015年以降継続して8割を超えており、おおむね良好であることがわかります。

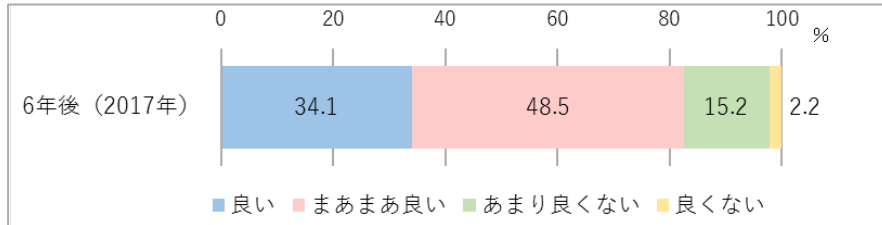


図 4-1 母親の健康状態

### 4.2 母親の症状の上位3位は一貫して「肩こり」「腰痛」「頭痛」

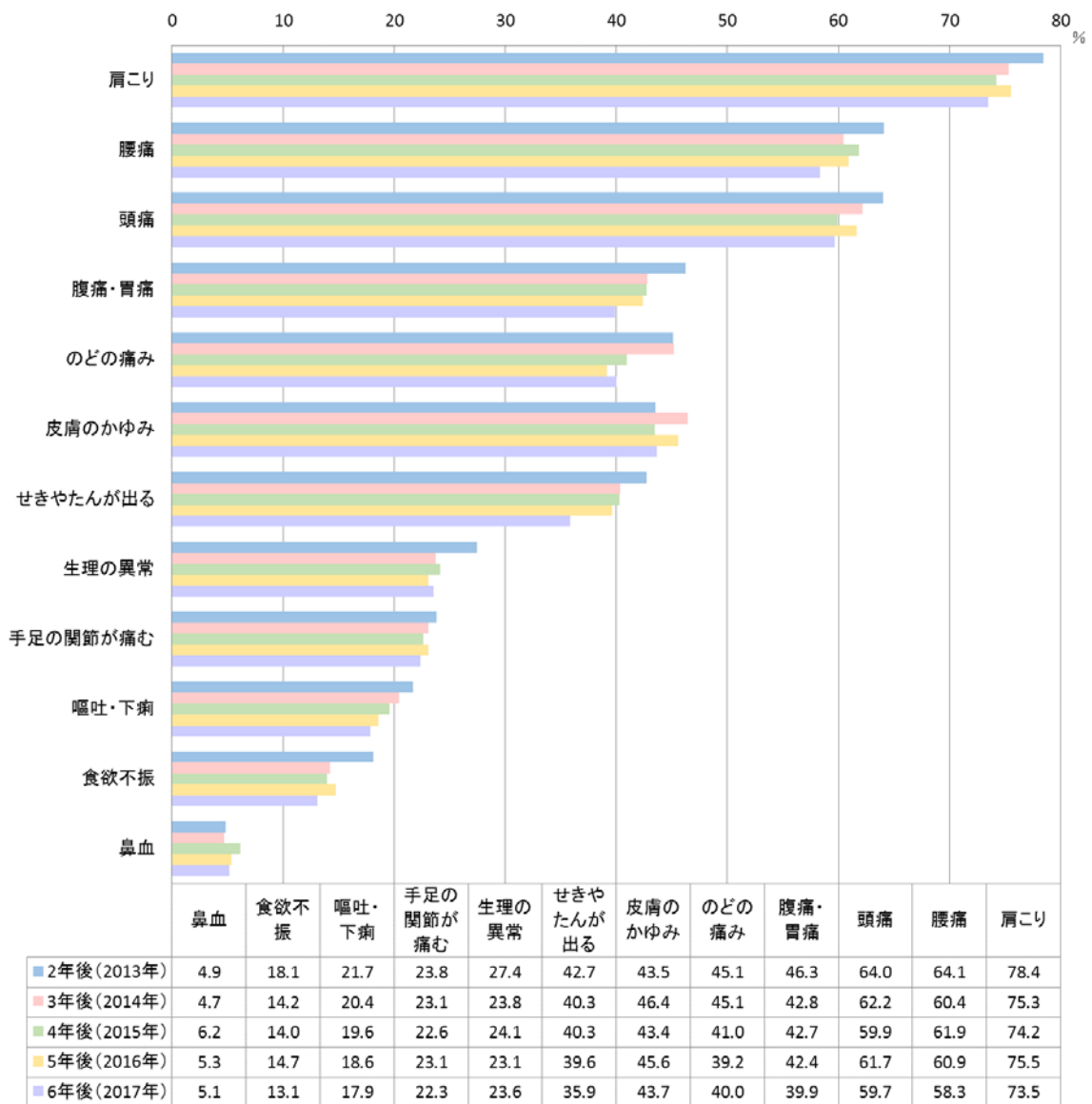


図 4-2 直近半年間での母親の自覚症状

\* 「よくある」 + 「ときどきある」の割合

### 4.3 母親の心の状態は安定している

下記6項目は、心の健康状態を調べる際に広く利用される指標（K6）です。原発事故直後から半年後にかけて、母親の心の状態は不安定であったことがわかります。しかし、その後、心の健康状態が不安定な方の割合は少なくなっています。特に4年後の2015年からは、ほとんどすべての項目において回答の傾向が変わらないことがわかりました。

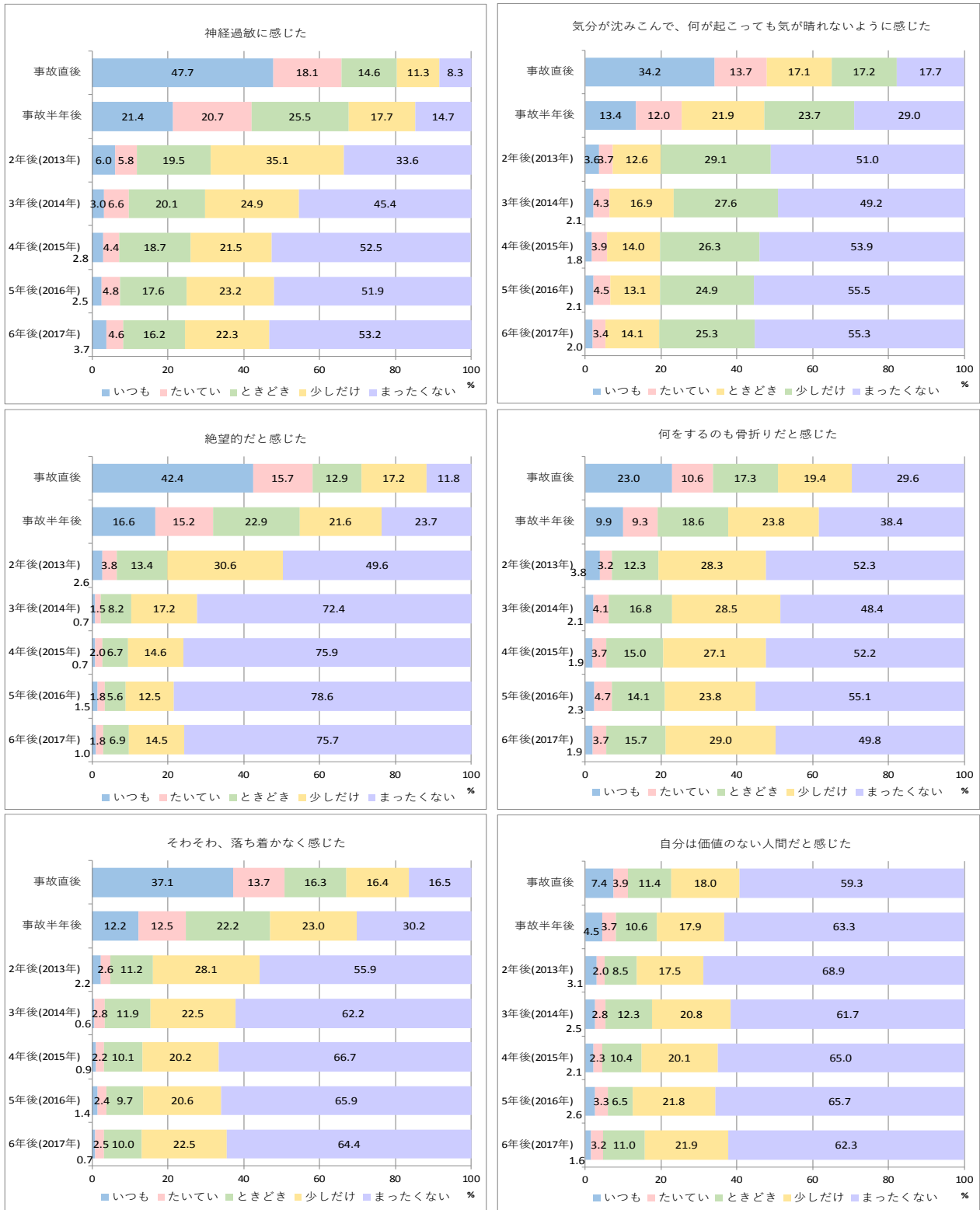


図 4-3 母親の心の健康状態

#### 4.4 災害後の心の健康状態という点では、まだ影響が残る

下の項目は、「災害後」の健康状態を調べる指標（SQD）です。図 4-3 の一般的な心の健康状態を評価する指標（K6）だけを見ると、福島の母親の心の状態は安定しているようにみえますが、約 60%の母親が「イライラ・怒りっぽい」「疲れやすく身体がだるい」と感じており、日常生活においてストレスや疲れを感じていることがわかりました。

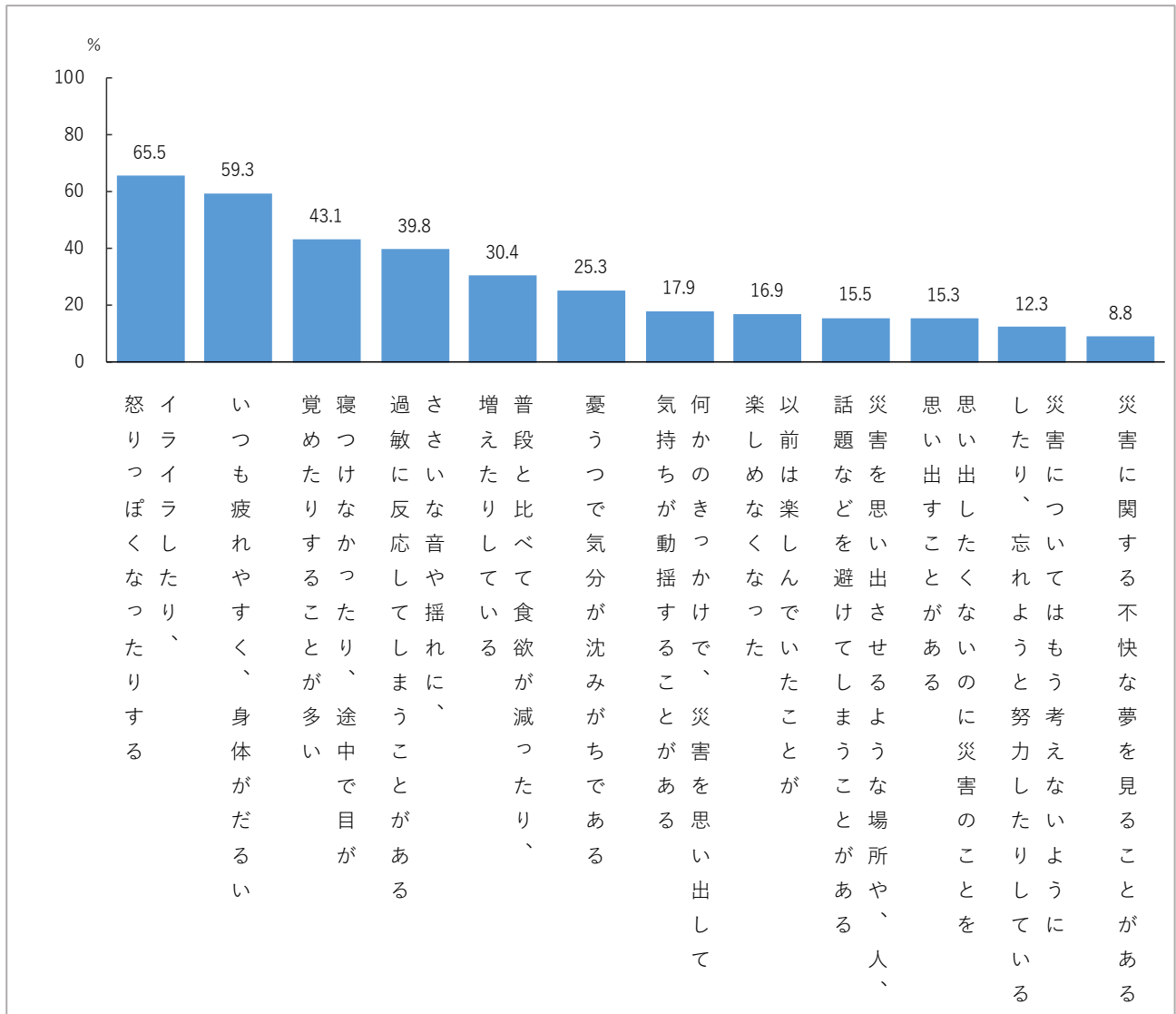


図 4-4 災害後の母親の心の健康状態

\* 「よくある」+「ときどきある」の割合

## 5 原発事故後の生活変化

### 5.1 放射能汚染の深刻度は徐々に緩和されているが、3割強の方が深刻と答えている

「お住まいの地域の放射能汚染について、どの程度深刻だと考えているか」については、「深刻ではない」が今年初めて半数を超えました。その一方で、「深刻」「ある程度深刻」と考えている方が3割強います。

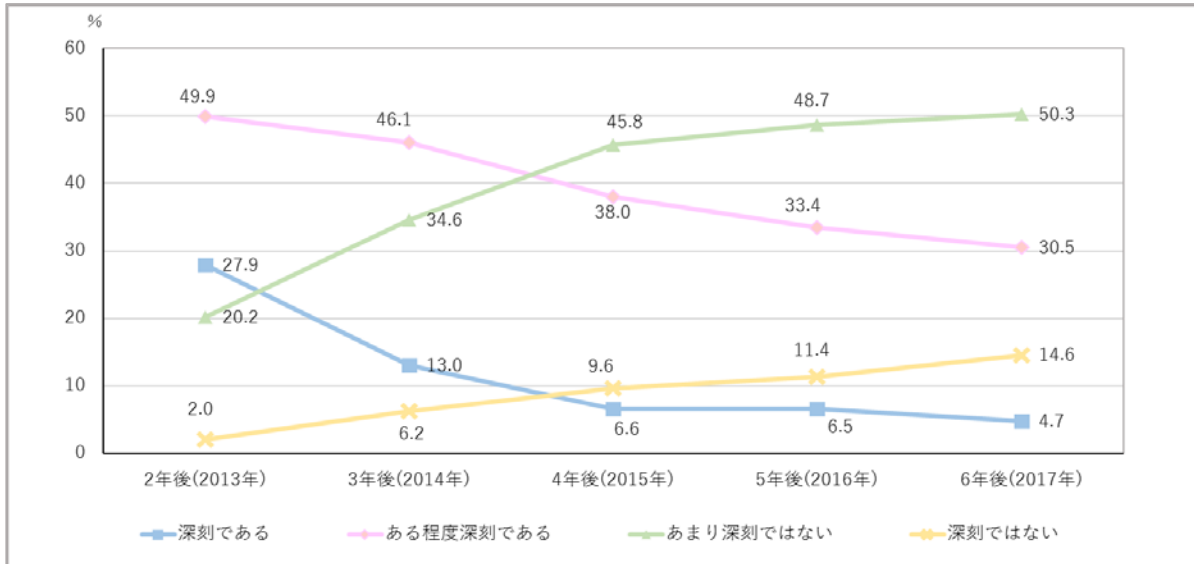


図 5-1 放射能汚染の深刻度

### 5.2 「保養に出かけていない」という回答がもっとも多い

今年、初めて「出かけていない」という回答がもっとも多い結果となりました。ただ、「よく出かける」「たまに出かける」を合計すると5割を超えています。事故から6年が経過した現在、程度の差こそあれ、半数以上の方が保養に出かけていることがわかります。

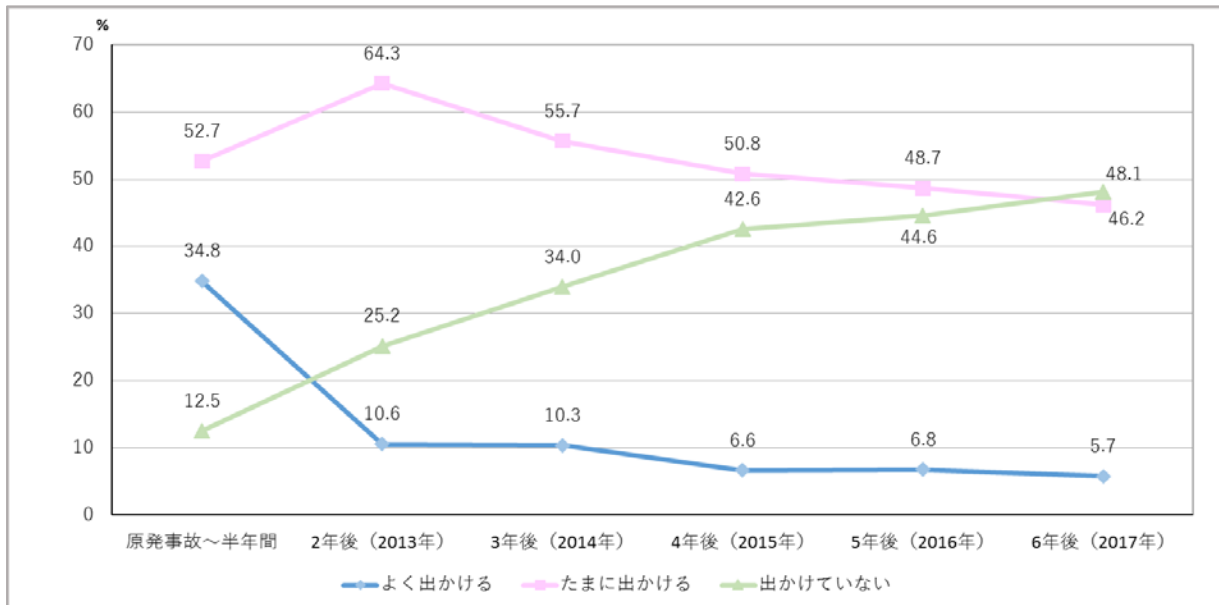


図 5-2 保養の頻度

### 5.3 原発事故後の生活変化は、「いじめや差別への不安」のみが増加

原発事故後の生活変化には4つの傾向が確認できます。

1つめは、事故後6年が経過してもなお、約6割の人があてはまると回答している項目（「補償をめぐる不公平感」「放射能の情報に関する不安」）です。

2つめは、ゆるやかな減少傾向にありながらも約4割から半数近くの方があてはまると回答している項目（「経済的負担感」「健康影響への不安」「保養への意欲」「子育てへの不安」）です。

3つめは、あてはまる方が急激に減少し、その後、横ばいとなっている項目（「地元産の食材を使用しない」「洗濯物の外干しをしない」「避難願望」）です。少なくなったとはいえ2割程度の方があてはまると回答しています。

4つめは、事故直後から該当者が少ないながらも、一定の割合で推移している項目（「放射能への対処をめぐる配偶者、両親、周囲の人との認識のずれ」）です。

「いじめ・差別への不安」については、昨年までは上記の「2つめ」の傾向に該当していましたが、今年は、福島からの避難者へのいじめに関する度重なる報道の影響でこの項目が増加したと考えられます。

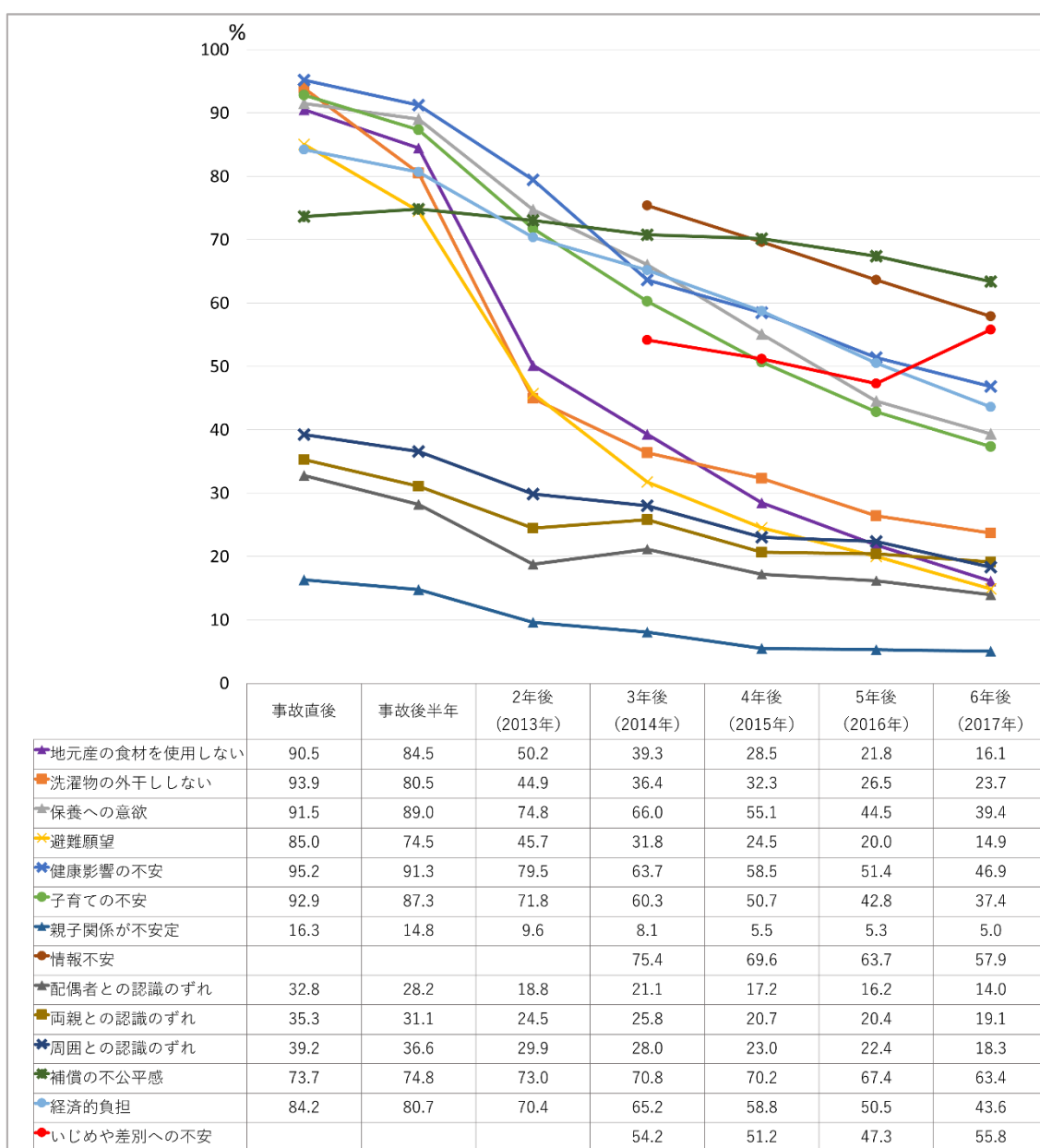


図 5-3 原発事故後の生活変化

\* 「あてはまる」 + 「どちらかといえばあてはまる」の割合

### 5.4 室内放射線量はほとんどが、毎時 0.30 $\mu$ Sv 未満

回答数自体が少なく、一概にはいえませんが、6年後の時点で室内放射線量が毎時 0.20 マイクロシーベルト ( $\mu$ Sv) を超えることがあったのは回答者のうち 21.8%、自宅周囲の放射線量が 0.30 マイクロシーベルト ( $\mu$ Sv) を超えることがあったのは回答者の 18.3% でした。

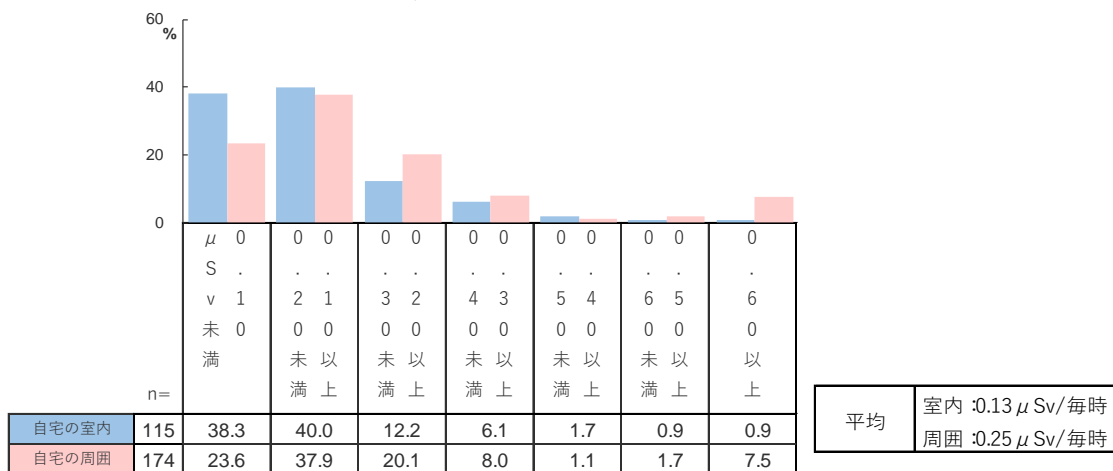


図 5-4 直近半年間で最も高い線量

※この平均とは数値回答の平均値

国際放射線防護委員会（ICRP）は、自然放射線や医療による被曝（ひばく）を除いた平常時の一般住民の被曝限度を年間 1 ミリ Sv としている。国はこの数値を福島原発事故による個人の追加被ばく線量の長期目標としている。空間線量が毎時 0.23 マイクロシーベルトで、1日の8時間を屋外、16時間を木造家屋内で過ごした人の追加被曝が年間 1 ミリに相当すると推計している。（朝日新聞コトバンクより）

### 5.5 放射能に関する情報源は「テレビ」が中心で、次いで「役所・医療機関」「新聞」「インターネット」

放射能に関して参考になっている情報源を複数あげてもらったところ、テレビが 72.3% もっとも多く、次いで、役所・保健所・医療機関（56.1%）、新聞（46.1%）、インターネット（43.5%）でした。

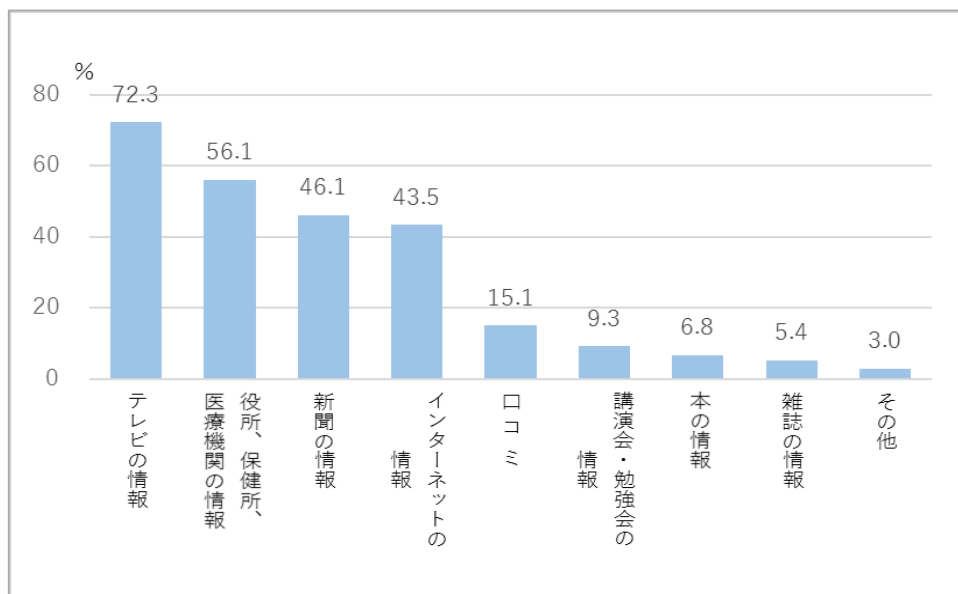


図 5-5 放射能に関する情報源

### 5.6 依然として5割以上が「子どもの将来の身体と心の健康」への影響を懸念

すべての項目において、年々その割合が低下していますが、依然として5割以上の母親が「子どもの将来の身体と心の健康」への影響を懸念していることがわかりました。

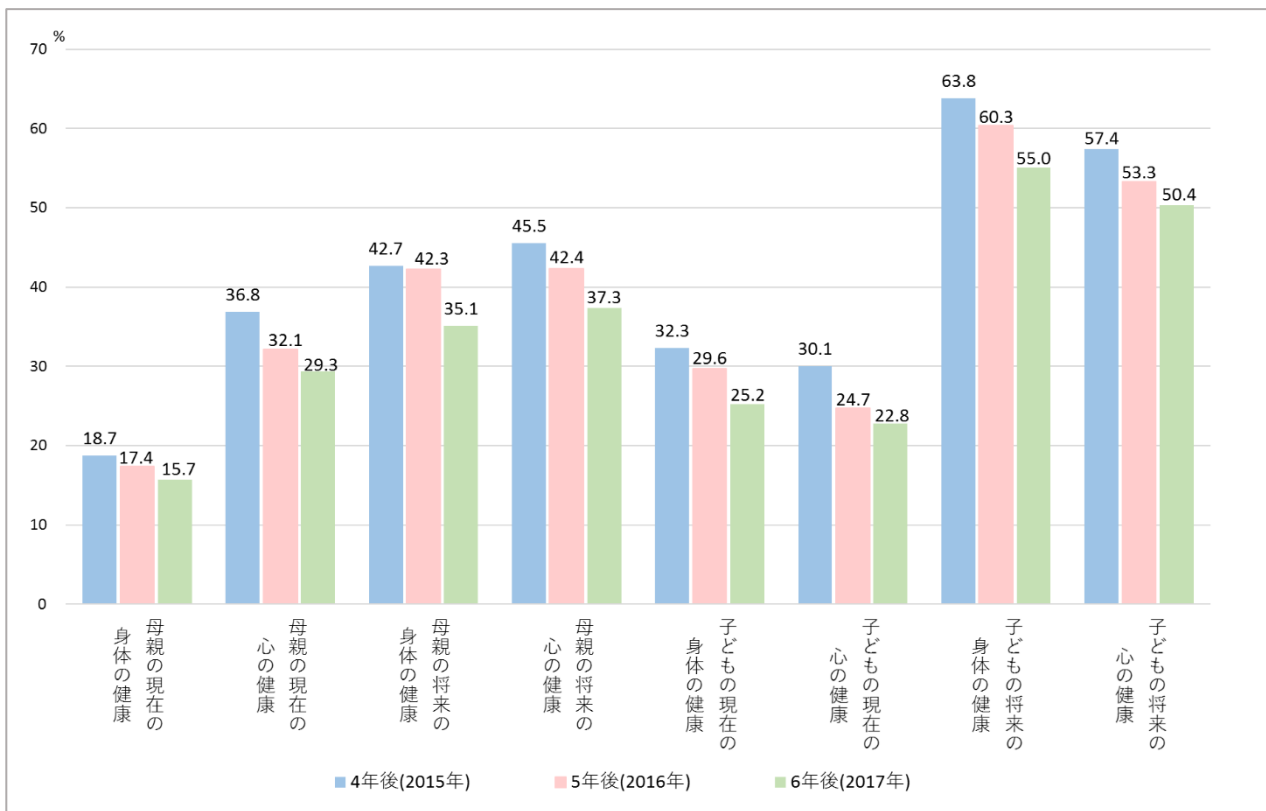


図 5-6 健康に対する放射能の影響度

\*「影響がある」+「少し影響がある」

### 5.7 3割以上の方が居住地で原発事故や放射能について話題にしにくいと感じている

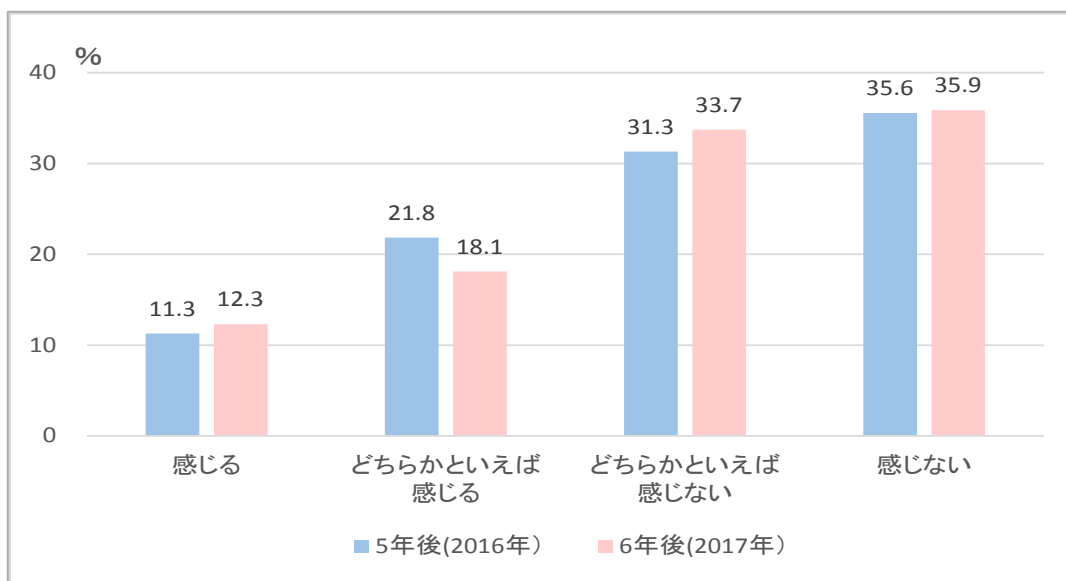


図 5-7 原発事故や放射能について話題にしにくい

## 5.8 居住地域で5割以上の方が原発事故の風化を「感じる」と回答している

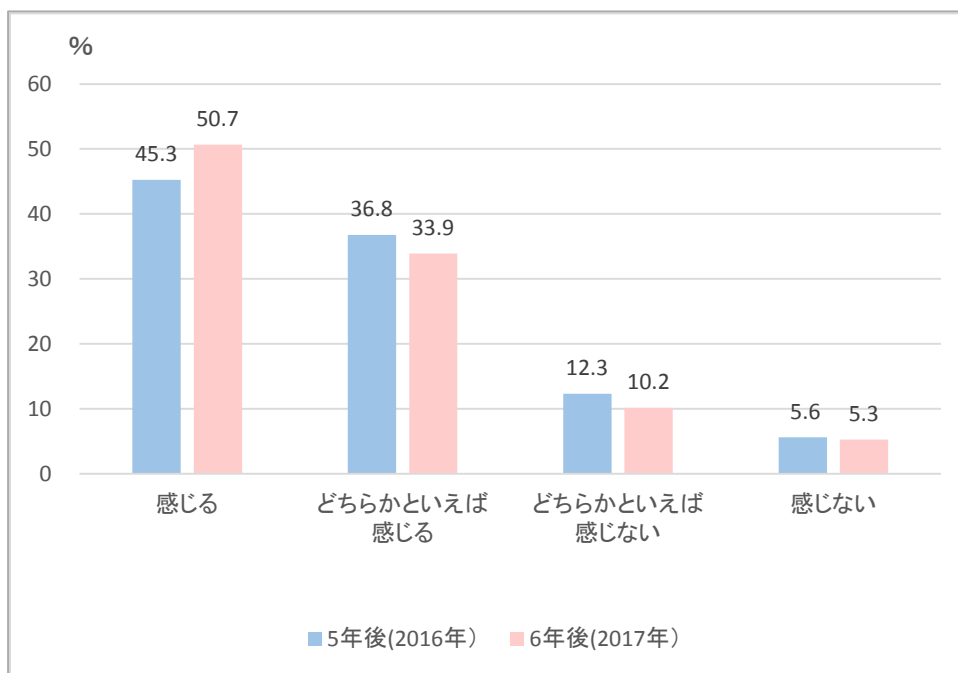


図 5-8 原発事故の風化

## 5.9 市町村、福島県への評価は徐々に改善

原発事故後の取り組みについては、「市町村」「福島県」は半数以上の方に評価されています。また、「国」に対しても3割近くの方が評価すると回答しており、他のどの項目よりも評価が高まったことがわかりました。一方、「東京電力」については、2割程度の評価にとどまっています。

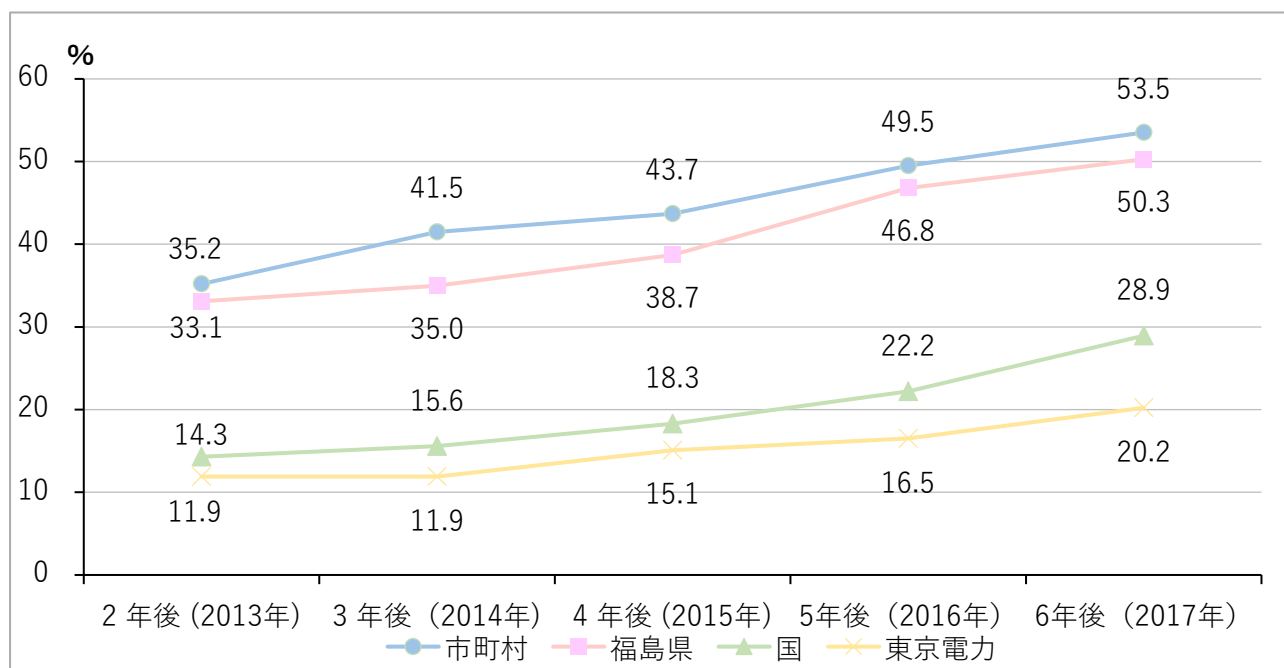


図 5-9 行政と東京電力への評価

\* 事故後の取り組みを「評価する」+「ある程度評価する」の割合



## 6 地域とのかかわりと居留意識

### 6.1 育児関連サービスは半数程度が利用

利用している育児関連サービスは「放課後児童クラブ」が25%と他の項目に比べ、圧倒的に高く、就業している母親が利用していることがうかがえます。

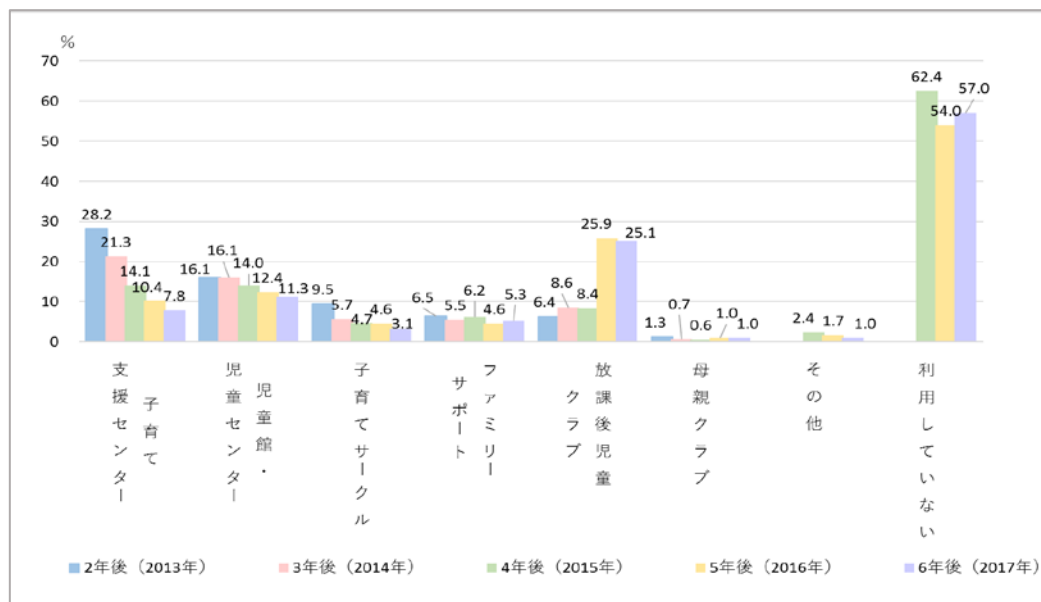


図 6-1 利用している育児関連サービス

\*「その他」と「利用していない」は第3回からの調査のみ

### 6.2 地域とのかかわりが強い

約8割が「親子会・PTA」に、約7割が「地区会・町内会・自治会」に加入しており、子どもの成長とともに地域とのかかわりが強まっていることがわかりました。一方、「趣味・娯楽・スポーツなどの団体」への加入も年々増加してきており、地域を越えたつながりも広がっている可能性があります。

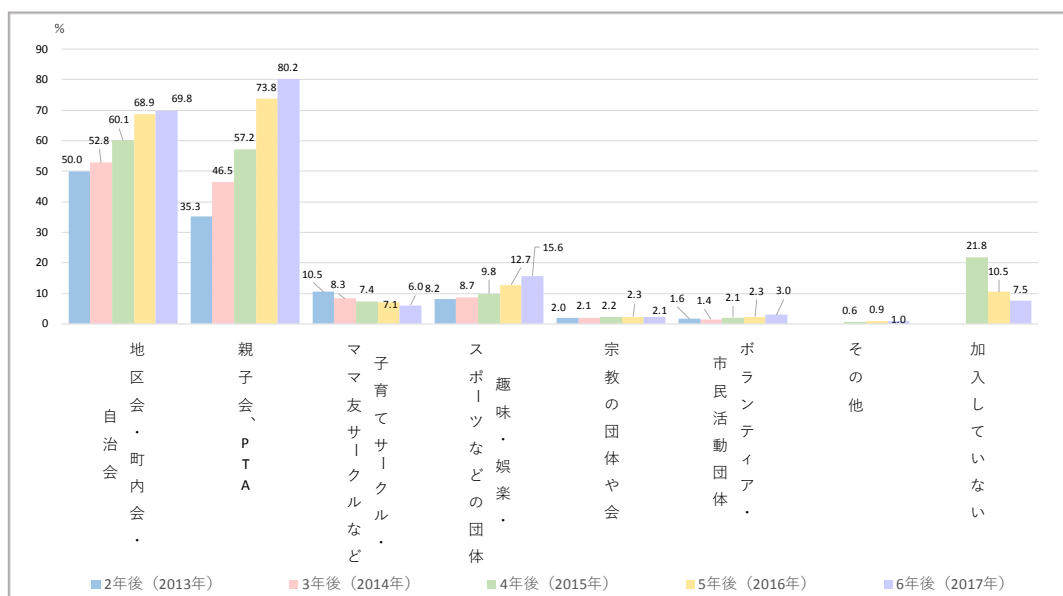


図 6-2 加入している団体・組織

\*「その他」と「加入していない」は第3回からの調査のみ

### 6.3 地元への愛着、誇り、人間関係の良さなど肯定的な回答が多い

事故前の水準にはまだ戻っていないものの、原発事故後、低下した地域愛着度は回復しつつあります。

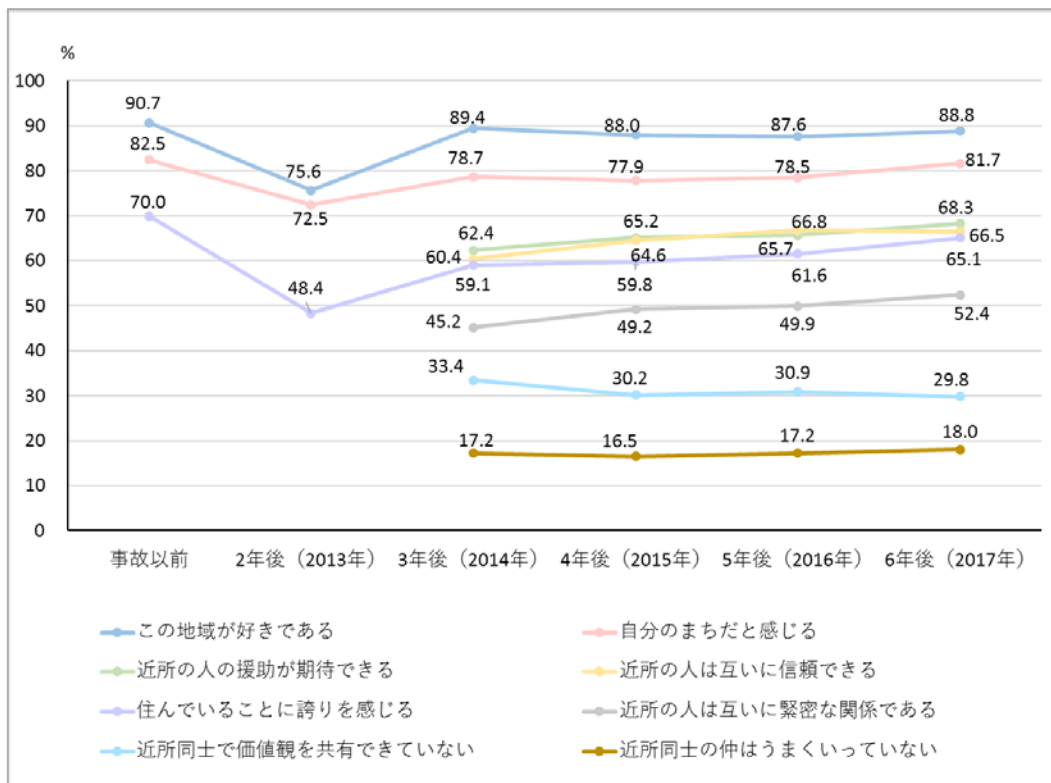


図 6-3 地域への愛着や人間関係の良さ

\*「あてはまる」+「どちらかといえばあてはまる」の割合

### 6.4 居住意思は「住み続けたい」が圧倒的に多い

現在の地域での居住意思では、「ずっと住み続けたい」「当分住み続けたい」の割合が9割近くいる一方で、「できれば引っ越したい」「すぐ引っ越したい」も1割以上の方にみられました。

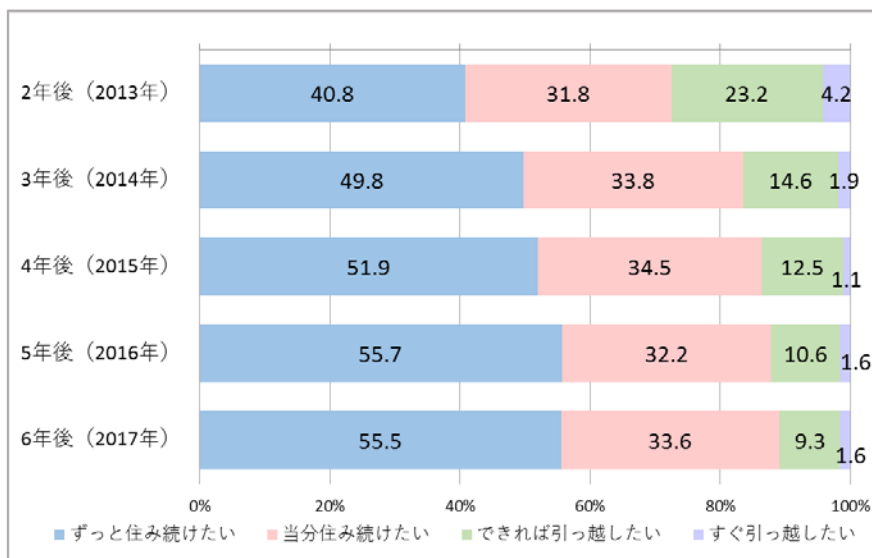


図 6-4 現在の地域での居住意思

## 7 回答者の特性

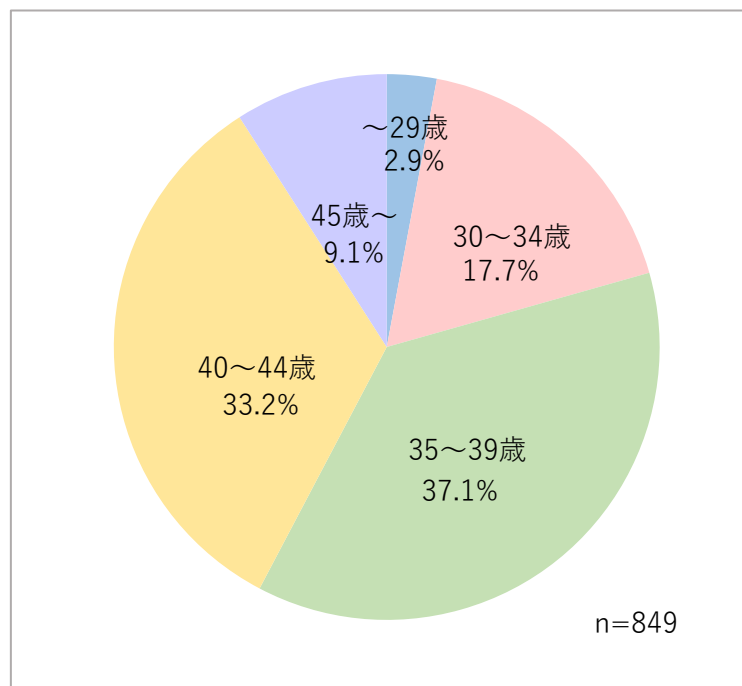
### 子どもとの続柄

		母	父	祖母	祖父	その他
	n=					
2017年調査	894	851(95.2)	40(4.5)	2(0.2)	1(0.1)	0(0)

### 母親の婚姻状況

		既婚 (有配偶者)	既婚 (離・死別)	未婚
	n=			
2017年調査	851	795(93.4)	49(5.8)	7(0.8)

### 母親の年齢構成



## 8 自由回答欄の声

自由回答欄には多くの意見が寄せられました。各調査の自由記述記入数は以下の通りです。今回の第5回調査の自由記述については、12項目に分けて紹介します。数字は、「福島子ども健康プロジェクト」事務局の3名が読んで数えた意見数です。ただし、重複を含んでいます。

	回答総数 (2017/4/3 時点)	自由記述 記入数	記入率	文字数	一人当たり 文字数
第1回調査	2,628	1,203	45.8%	252,047	209.5
第2回調査	1,606	718	44.7%	153,938	214.4
第3回調査	1,209	746	61.7%	151,677	203.3
第4回調査	1,021	612	59.9%	117,171	191.5
第5回調査	895	537	60.0%	99,255	184.8

自由記述分類	言及した自由記述の数 (第5回調査)
差別不安	162
子どもの将来の健康不安・補償不安	109
風化を感じる	105
賠償金不満	64
放射線量・土壌・食料への不安	53
生活が元に戻ってきている	51
地震への不安	46
国、福島県、市町村、東電の対応	37
甲状腺検査	27
風評不安	19
原発への否定的な意見	14
情報不安	13
避難と帰還をめぐる思い	13

<p>差別不安 162件</p> <p>相次ぐ福島出身の子どもへのいじめに関する報道への言及 自分の子どもも将来同じようなことになるかという不安</p>	<p>いじめ報道があったように、水面下では大人も子供も関係なく様々な苦悩をかかえている。福島県民が悪い事をしているように思われているが、誰が使用するための電力を作っていて誰が稼働させたのかよく考えて欲しい。被災した子供たちが結婚、出産する時期に相手の家族がどれだけ理解しているのかとても不安を感じている。</p>
	<p>避難している子どものいじめなどテレビで知ると、6年経って風化はされているのに、心の嫌な部分は風化されないのだと感じます。子供たちがすることは大人がしている、言っていること。これから、子供たちが大きくなって出身県を発言した時、どう思われるのか、など心配は尽きません。転職して違うところに家を建てたとしても子供の転校でいじめられないかなど心配は尽きないのです。</p>
	<p>テレビでの子供のいじめの放送を見て、震災や原発事故のことは忘れられているのに、根強いいじめだけは残っているのだと心が痛くなります。福島というだけでいじめの対象になり、「お金たくさんもらっているんだろ！」と言われ、私達福島市民、自由を奪われ、生活だって変わってしまい、子供達の将来のことを思うと不安になり、賠償金なんて全然です。</p>
	<p>福島から避難した人たちがいじめにあっているニュースを聞くと「あーやっぱり」と思う。将来子ども達が結婚などといった時に影響がないといいなと願う。</p> <p>福島を離れたいと思う一方で、全国で福島県出身のまたは避難していった方々への心ない言動、いじめが起きている事を悲しいと思います。そして心配です。我が子が将来、進学や就職で福島県を離れていっても大丈夫なのか、福島にいる事がこの子の結婚や人間関係の足かせになるのではないかと思ったりもします。全国の人たちは福島県民に対してどのように思っているのでしょうか。被害者？汚い？菌？事実を正確に伝えてくれる 明らかにしてくれる機関がほしいと思います。</p>

<p>子どもの将来の健康不安・補償不安 109件</p> <p>今は健康でも将来は健康かどうかという不安 何かあったときに補償はあるのかという不安</p>	<p>震災後6年になるが、子供へ対する健康の不安があります。大人はもうあきらめの気持ちですが、子供達の将来には考えても市、県、国が助けしてくれるとは思えないし、原発への怒りしかない。</p>
	<p>今の生活で震災のことが影響しているようなことはほとんどありません。ただ、将来、子供達や私達に何か不具合がおきるのではないかという不安は抱いています。</p>
	<p>まだまだ子供の成長について、今後どのような問題が出てくるのか、なぞだらけ。郡山市は補償が少なすぎる。金銭面についても1度だけで、甲状腺の検査やホールボディカウンターの検査も未だに2回のみ。金銭的補償をもっとしてほしい。</p>
	<p>一番の不安は、将来の健康だ。特に息子の体は大丈夫なのか、今後何か病気にならないか、などとは、時々考えてしまうことだ。目に見えないものとの戦いは、体験している人にしか分からない苦しみであることは、間違いないと思う。</p>
	<p>将来的な事、自分たちはいいにしても子供たちに何か影響が出るか？(健康被害) 心配でならない。それは、誰にも分からない事なので、もし何かあった場合、国としてはきちんと対応してくれるのか？不安だ。ガンなどになるとすると、1人や2人ではないと思うので...</p>
	<p>子どもの甲状腺ガンの患者も年々増えており、心配は尽きません。子どもの鼻血がなかなか止まらなかったり、胸が苦しいと訴えてくる事もあり、何らかの影響があるのではないかと感じてしまう。これからも、子ども達が、健康で過ごしていけるように ただただ願っています。</p> <p>風化している感じがしている。このまま何も無ければ良いが、健康被害がもし何年後かにあったら怖いなあと感じます。</p>

<p>風化を感じる 105件</p> <p>原発事故が あったことを 忘れていつて いる</p>	<p>災害が全国的にある為か、風化していると思います。</p>
	<p>復興も進み、風化しつつあるかと思っています。ただ、ピンチを乗り越えてきた子供たちは、人を思いやる気持ちを持てる子が多くいるように思われます。子供だけでなく、大人も子供たちの成長をまの当たりにして、日々子供や多くのパワーを頂いて生きていていると思います。</p>
	<p>風化している感があります。自分でも感じます。ただ、嫌な気持ちになったりすることはないです。この調査を通して、少しでも風化してしまうことが避けられたらと期待します。</p>
	<p>とても風化しています。風化して良い点は子ども達も地震があっても気にする事もなく不安を感じる事もなく生活できている点です。あまりよくない点は、補償もなくなり忘れさられている感じがします。子ども達の健康調査も面倒になってきました。</p>
	<p>日常生活の中では、話題になることはほとんどないです。子どもの検査通知などで、「そういえば…」という感じで思い出します。子供も元気に外で遊んでいるので、確実に風化しているし、原発事故前の日常に戻っていると思います。</p>
<p>震災が遠く昔のこのように思う時があります。怖さを忘れていつてるように感じます。原発事故のことも、何年かしてから、体に影響があるのでは？と忘れてしまいます。</p>	

<p>賠償金不満 64件</p> <p>賠償金の金額 や対象への不 満</p>	<p>福島県内での補償への不公平感は大きくなるばかりです。本当に必要な人、そうでない人、もう一度考える時期にきていると思います。</p>
	<p>・近所に、広い土地に大きな立派な家、つらい心境を察するものの、高い補償をもらっているんだろうなという目で見えてしまいます。まじめに働き収入を得て節約した生活を送っている私々と、そういう家や人達を見ると、なんだか悲しくなってきます。ちなみに、そのような補償のお金で建てられたと思われる立派な家は「原発御殿」と言われています。他県の人から見れば、原発事故で福島の人はいくさんの補償金を受けとっている、と思われがちですが、それは一部の人達だけだ、ということをお互いに分かってもらいたいのが本心です。</p>
	<p>自主避難に対して賠償金が出ないのはおかしい！！出さないなら、原発事故前に戻してほしい！！</p>
	<p>補償の内容に問題があると思う。本当に困っている人、住宅・土地が該当地域の方は当然だが、アパートや借家の人達が今でも月々補償があるのは、かたよりのあると思う。そのお金があるから旦那さんが働いてなくて、毎日家族で遊んでいる人達もいます。難しいとは思いますが、働ける人、住宅土地持ちの人、と補償の内容も区別して欲しい。私達は2回補償をもらっただけで終わりでした。今でも子供達の水も購入しているし、ちょっとずつですが、毎月出費もあります。もっと平等に考えて欲しいです。</p>
	<p>福島県でも帰還がすすんでいます、帰らずに残ると決めた人が住宅を購入するため、地価が上がり、土地がない状況があります。長年吸いつくした甘いしるでできた豪邸を見ると、不公平感は誰でもつものります。自分たちだけ被害者という意識をいい加減にしてほしい。苦しみは皆同じだと思います。除染がおわったらすみやかに帰っていつてほしいです。そんな人たちに自分の故郷をけがしてほしくないです。</p>
<p>家賃補助打ち切りが迫る中、自主避難者の処遇に関する報道も増えてくるでしょうから憂うつです。はっきり言ってわがままなので。福島を苦しめているのはまぎれもなく自分達なのだ早くお気づきになってほしい。もういい加減、よその土地の住民として堂々と生きていく覚悟を持っていただきたい。誰かはっきりと、強く伝えて差し上げて下さい。福島に残る母子のために、そのお金使ってください。</p>	

	<p>6年にもなるのに、今もまだいじめ問題や風評被害に苦しめられて、避難者だけがお金をもらい続けて、本当に6年にもなるのに、納得いかない事ばかりです。放射線の数値も避難地区より今まさに私達が生活している場所の方が高いのに私達には1円のお金もいただけません。避難というだけで月に1人10万~20万近く(30万っていう人もいます)国や県、東電は何を見て補償しているのでしょうか???もう皆さんあきれしております。</p>
--	--

放射線量・ 土壌・食料へ の不安 53件  減らない線量 除染されてい ない土地 土嚢の除染土 地元の食料 への不安	震災からは6年が経とうとしています。放射能の不安が、少し無くなって地元産の野菜も食べるようになりました。しかし、いつも頭の片隅には、「本当に大丈夫だろうか?」という疑問があります。日常生活を送るのに、支障はありませんが、事故前の不安のない気持ちには戻れません。
	あまりにも除染後の土の保管が悪い!!野ざらし、雨ざらしで、生活のすぐそばにある。いくら路肩や側溝を除染してもその比じゃない量がすぐそばにある。今も熱心に道路を除染して下さっている業者さんには頭が下がります。雨でも雪でもやって下さってますので。ただ、現実をみて、優先順位を意識してほしい。権限のある方がしっかりしてほしい。
	相変わらず、食べる物に関しては福島産の食材は選んでいませんが、学校給食では使用されているので、検査はしているとは言っても、子供の将来の健康についての不安は多少あります。ですが、福島で生活していく以上はもう考えても仕方ないので家で作るものに限っては、県内産のものは買わず、県外産の物を買っています。毎日、テレビのニュースの最後には必ず放射線量の測定結果を公表していますが、なんとなく信用していないので、あまり線量については見ていません。
	郡山市では至るところにモニタリングポストがあり、0.1~0.2μSv/hと表示されていますが、側溝や草むらのしげみ等除染していないところは未だ1μSv/h超えるところもあります。郡山から離れたい気持ちは変わりません。
	現在住んでいる地域は井戸水で、水質検査すら行っていません。実際のところ、安全か危険かも誰も知りません。自治体などでの検査等望んでいます。町民の方々は、あたり前のように生活しているのには、不安を感じます。少し話題に出せば、「神経質」で片付けられる感じです。
	ニュースで第一原発2号機のニュースを見ました。きっと私達は気が付かないだけで、風や雨雲などに乗り、放射能が飛んで来ているのだろうな、海もだいぶ汚染され、魚など生き物に食物連鎖によって、人間にも取り込まれているのだろうなと思っています。

生活がもとに 戻ってきて いる 51件  震災前と変わ らない生活に 戻っている あるいは戻り つつある	時間の流れなのか慣れなのか、生活も気持ちも徐々に前のように戻っているような気がします。
	子供は、のびのびと近所の友達2~3人と遊んでいます。我が子も近所の子供達も、ほとんど線量計のガラスバッジをつけている者はいなくなりました。原発事故前の普段の生活にすっかり戻りました。何も心配もしなくなっただけが、私の今の生活です。庭に積もった雪遊びも、みんな元気にやっていますよ。
	6年たつと、まるでなかったかのようにすっかりもとの生活になっています。
	東日本大震災、福島原発から6年になりますが、何もなかったかの様に生活しています。皆記憶からうすれていく事が悲しく思われます。

地震への不安 46件  2016年度に地震が多かったことによる不安	時々、地震があると、下の娘は泣いて、起きてしまいます。私も、そのあと数日は動悸、めまいがふえてしまいます。まだ、心の中で何か残っているのだと感じます。この体の不調はなった人じゃないと理解してもらえないと思います。震災にあった人達は、みんなこうやって地震があることにずっと体が何かに反応してしまうのでしょうか。
	先月、大きな地震が何度かありました。大きな揺れと共に、ケータイからの警告音、久しぶりに大震災の時の恐怖を思い出しました。まもなく6年、これからも忘れてはいけない出来事として子ども達に伝えていかなければいけないと思います。
	毎日の日常は普通です。ただ大きな地震があると津波が心配になります。また原発が津波の被害にあって放射能が降ってくるのではないかと...と。この心配はこれから何百年と続くのか。
	大きな地震があるたびに、原発がどうにかならないのか不安を感じる。もしまた爆発したら、今度は、みんな被曝してしまうのではないかと思うとこのまま、福島で子供を育てていて良いのか？と思う事がある。

国・県市町村・東電の対応 37件  原発事故時とその後の公的機関の対応への不満や意見	線量は低くなってきているようだが、生活環境を整えるために、国や県は何をしているのかわからない。側溝の除染も（自宅周辺）今頃になって、やっと実施した状況。もっと早急に実施することはできなかったのか。まもなく6年になるが、自然に線量が低くなるのを待っている。風化してきているように感じる。今までの国や県の対応を考えると不満は多い。
	あの時の国の対応は今でも忘れません。きっと国も手探りだったのですが、すばらしい完璧な対応だったとは思えないし、国はこれからも信用できません。本当に無能でした。自分たちの命は自分で守るしかないのだと言う事が、良く、分かりました。
	今現在病気等発症していない子供たちも、今後発症した場合、国・県・市・東京電力側はどのような対応をされるのか。福島原発事故が要因である証拠がないから申請が却下される可能性が高いと勝手に考え、不平不満が募ります。
	6年が経ち、だいぶ前の生活に戻ってきました。そんな中、最近特に思うのが、事故後の補償の不公平さです。その補償費を国で負担するかも（＝税金があがる!?)と聞き、更に怒りを覚えました。これが最近の率直な心境です。

甲状腺検査 27件  検査の結果に対する不安	昨年のニュースで、福島県の子供の甲状腺ガン人数が増えたということを知りました。県では、原発・放射能による影響ではないと言っていますが、どうしてそう言いきれぬのか納得できません。福島県以外の子供の甲状腺の検査をしてデータをとってみる等、きちんと、本当に放射能が原因ではないという証拠がないと安心できないし、信用もできません。
	甲状腺の検査で、子供が2次検査を受けることになったが（前回も）、親はその結果を見るたび、不安を感じてしまう。結局、経過観察のような、今は大丈夫という診断になるのだが、本当に大丈夫なのかという疑問はつついもってしまう。医学や放射能に関する知識はもっていないので、信じるしかないのだが。
	子どもが甲状腺がんの検査をして、結果をみると、ものすごく心配になります。放射線の影響は、一生つきまとうのだなああと考えると、かわいそうな気持ちになりますが、元気に小学校に通っていますので、その様子に安心させられています。
	子供の甲状腺の検査の結果が、年々、悪くなっていて、とても不安を感じます。何を信じてよいのか、どこまで信じれば良いのかわからない。このままで、成長していくにつれて体に本当に影響が無いのか。



<p>風評不安 19件</p> <p>福島の人、 物に対する 風評への不安</p>	<p>食品を製造している仕事をしているので、インターネットの書き込みなどで、時々福島の食品に対するごく一部の間違っただコメントを見ると残念に思います。</p>
	<p>牛や魚など風評被害もまだ残っているので、その様なニュースを見ると、元の生活へ戻れる様考えてしまいます。</p>
	<p>「福島第一原発」とメディアで福島の名を扱う事が苦痛です。東京電力で関東の方のための電力供給を行っていたのにもってしまいます。震災の風化はあっても風評被害は消えません。</p>
	<p>今朝の新聞には、熊本地震のときに福島の人が熊本へ善意で救援物資を届けようとしたら「福島のものはお断り」と熊本より断られたことがあった記事を読みました。まもなく6年になるのにまだ風評被害はあるのだなと悲しく悔しい気持ちでいっぱいです。</p>
	<p>福島市の老舗で人気の納豆屋さんが、風評被害による売上げ減のため閉店してしまいました、おいしかったのに。</p>

<p>原発への否定 意見 14件</p>	<p>原発は本当に必要なのか？をよく考えてほしい。</p>
	<p>未だ原発稼働に尽力している国が理解不能で不安でなりません。</p>
	<p>国内の原発は全廃！再稼働なんてありえません。</p>
	<p>原発の廃炉作業はまだまだ始まったばかりです。それなのに、あちこちで再稼働を進めていて、この国はいったいどうなってるのか理解に苦しみます。私が子供達に思うのは、これ以上、負の遺産を増やさない世の中にしたい、ただそれだけです。</p>
	<p>まもなく6年なのに、東電のニュースを見る度にがっかりします。こんなに廃炉作業に手間取っているのに、どうして原発なんか作ったのでしょうかね。地震がおこる度、体に不調がでる度に、心配になり不安になり、原発さえなければという気持ちがわいてきてしまいます。（原発の廃炉作業で）目に見えて希望がもてるものがあれば、気持ちもちがうのに。毎日が不安というわけではありませんが、この気持ちを子供達まで味わうことになるのではということが、とても悔しく思います。</p>

<p>情報不安 13件</p> <p>情報が減っている、どれが正しいのか分からないなどの不安</p>	<p>放射線の情報が減りつつある事に少々の不安を感じています。</p>
	<p>今のところ福島県内ではだいぶ不安も少なくなっておりますが、一部のネット情報等で、“福島の実実”、“語られることのないタブー”的な事が見うけられ、がっかりというか、悲しいというか、とおりにしてしまっ「???’ポカーンとしてしまう事も多々あり、ネットはあまり見ないようにしています。</p>
	<p>原発事故後の避難先での子どものいじめなどの問題も昨年などニュースになりましたが、情報が様々な角度からあふれている中、間違っただ情報が流れてしまうのはなかなか防ぐことは難しいのでしょうか…。自分の目で見て、確かめて、自分の感情だけではなく、相手（受け手）のことも考えての情報であればいいなと思うこともあります。「福島県＝原発事故＝放射能」というイメージがいつの日か変わるといいなと思ったり、忘れてはいけないと思ったり…何とも複雑ですね。</p>
	<p>何が本当なのか、実実か、未だに分かりません。不安は消えません。</p>
	<p>どの情報を信じて、どのくらい気にすれば良いのかと言うことは今も考えています。ひとりひとり、温度差がありすぎるのでは？と思っっています。おらかな人、神経質な人、原発問題なしにしても、色々な人がいます。これはしょうがないこと。</p>

<p>避難と帰還を めぐる思い 13件</p> <p>原発事故を きっかけに 避難されて いる方の思い</p>	<p>子供達は、それぞれ環境に馴染み、今や福島県に居た事は覚えていないようです。子育ての環境、温暖な環境そして一番大切な教育の環境も整っている今の生活に子供にとっては申し分ありません。しかし、私の故郷はやはり実父母が居る東北であり、いつかは必ず戻りたいと思っています。未だ戻るに戻れない状況に、ふとした時に「なぜここに居るのか？」と悲観的になる事があります。故郷のニュースを観る度に望郷の念にかられます。</p>
	<p>ここでしっかり腰をすえて子育てをと思いつつも、自分と主人の両親がいる福島への思いもたち切れず、未だに決断できない自分がいます。テレビで震災や事故の映像「花」や「ふるさと」の曲が流れると以前よりも涙がこぼれてくるようになった気がします。子どもたちをできるだけ遠くへと必死で無我夢中だったんだな、落ち着いた証拠かなと感じています。まだまだ迷うこともたくさんありますが、今できることをがんばっていきましょうと思います。</p>
	<p>前代未聞のことなので、未来は分からないから、できればもっと福島から離れて暮らしたいが、夫との相違があり、仕事のこともありここが限界だと思ふ。でも福島にずっと居たかった想いもちろろんあり、両親や兄弟と離れている暮らしにくさを日々感じている。子育てをするにはやはり両親等サポートがなければ難しい。最近病気がちの為特にそう感じる。福島へ帰省すると周りのまだ避難してるの？的な目を感じる。子供のいじめ問題も心配だ。ニュースで取り上げられてることもアルアルと実感する。今後思春期になっていったときの子供のいじめも心配。余裕があるわけではなく、金銭面も心配。避難に費やした費用がかさんでいる。</p>
	<p>将来、福島にもどって大丈夫なのか考える。（家を持ちたいと考えるようになってきたこともあり）福島第1原発の今後を不安に思っている。炉心溶融したものを本当にとりだして安全な土地へ、とあってほしいと思うも難しいんだろうなあと痛感している。子どものことを考えると現在の土地にだいぶ基盤が出来てきたこと、原発のことを思うともどりにくい状況です。</p>
	<p>実家に移転したことで、子育ての時間もでき、友人も増え、年々充実する毎日です。初期は体調不良 いじめ 情報への不信等もあり、自主避難交流会を始めました。今は、私は大丈夫ですが、住宅の援助がなくなったり、子供の進学、これからの未来を描けない人たちにどうかかわっていくのか、増えていくであろう多様な自主避難者をどうしていくか、が不安です。</p>
	<p>娘も小学校に入学し、約2年がたとうとしています。初めは避難できるうちは、できることを、やっぴいこうと、両親で決めたことなのですが、最近は、娘が「転校はしたくない（戻りたくない）」と言います。新たな問題も出てきたり、年月が経つにつれ、状況も複雑に変化している気がします。残念ですが、国が、何もしないので、自身で判断し、母子避難を続け毎週夫は通い、月1回は、母子が自宅に帰省し、祖父母に会ったり泊りに行ったり、食事したりと、できることをしているだけです。</p>
	<p>借上げ住宅も終了するので、個人契約へ切り替え手続きをしていますが今後やっぴいけるか不安です。でも地元へ帰るにはもう友人との心も離れてしまっているし、また1から生活をやり直すのも子供に負担がかかると思うと、ここでがんばるしかないのかなと思います。</p>
<p>避難先から地元に戻りました。大丈夫だと思って帰ってきたわけではなく、帰るしかなかった（もちろん帰ってきたかったが）といった感じですが。地元で暮らすメリットも避難先と比べたらたくさんあり、ホッとしている部分もあります。私も子供も以前より体調が良くなっている程です。でもやはり、不安は消えませんが、またどこかへ、やはり住み変えた方がよいのでは、と思いつつも年齢、仕事のこと、親のこと、考え出すとなかなか動けず辛いところです。本当はここに居たいのに。そんな毎日です。</p>	

	<p>私達は、福島県から母子避難で、自分の実家にお世話になってます。でも、もうすぐ6年、そんなにお世話になるつもりはありませんでした。子供達も、こちらの生活に慣れ福島には帰りたくないと話してます。主人は、福島で生活しているので、私達が実家を出て二重生活をするのも、難しく。いつまでも実家に世話になっているわけにもいかず。どうしたらいいのか、毎日考える生活に疲れます。子供を強制的に連れて帰るのも、考えますが、連れて帰って学校行けなくなったり、イジメも心配です。</p>
	<p>震災は忘れていないが、思い出すのがつらいときもある。岩手、宮城の復興はめざましく発展を感じるが、福島は原発の問題もあり、帰りたくても帰れない。避難先で家を建てる人もいて、故郷に戻るのも困難らしい。福島の復興はまだだと感じる。</p>

## 9 おわりに

今回の調査結果は、以下のようにまとめられます。

- お子さんの外遊び時間は年々増加し、回復傾向にあることがわかりました。ただ、テレビ・インターネットをみて過ごす時間も少し長くなっているようです。
- 親御さんがお子さんと一緒に遊ぶ機会は、減少してきていることがわかりました。おけいこや習い事など、お子さんのライフスタイルの変化がうかがえます。
- お子さんの適応と精神的健康については、女の子は年々支援の必要性が低くなってきていますが、男の子については昨年より支援の必要性がやや高まっています。
- お子さんの健康状態は良好ですが、「頭痛」が年々増加しているようです。
- お母さんの健康状態も良好ですが、「肩こり」「腰痛」「頭痛」が一貫して多いようです。
- お母さんの心の状態はおおむね安定しています。ただ、災害に関連した心の状態を評価する SQD では「イライラ・怒りっぽい」「疲れやすい」といった症状が多く、震災・原発事故の影響が残っていることを示唆しています。
- 今回初めて、「保養に出かけていない」方がもっとも多くなりましたが、依然 3 割強の方が地域の放射能汚染は深刻だと考え、半数以上の方が保養に出かけることがあるようです。震災・原発事故の影響は未だ日常生活にも残っているといえます。
- 「いじめや差別」への不安が増加し、「補償の不公平感」「放射能情報に関する不安感」は高いままです。「健康への影響」への不安感も半数程度の方が感じています。少なくなったとはいえ、地元産食材や洗濯物外干しへの抵抗感、周囲の人との認識の違いなどに悩む方もいらっしゃいます。
- 3 割以上の方が「原発事故・放射能を話題にしにくい」と感じ、5 割以上の方が「原発事故の風化」を感じています。
- 事故後の取り組みについて、福島県・市町村への評価は徐々に改善されつつあるものの、国および東電に対する評価は低いままです。
- 地域への愛着や住み続けたいという意識については、9 割近くの方が肯定的です。一方、転居意思のある方も 1 割以上みられています。

時間の経過とともに原発事故の風化が進み、生活も原発事故前の状態に戻りつつあります。お子さんとお母さんの健康状態もおおむね良好で、お母さんの心の状態も安定してきています。しかし、母子ともに現在は健康であるが、将来の子どもの生活や健康に影響があるのではないかという不安は解消されていません。くわえて、補償の問題や行政の対応の不足など、さまざまな課題も残されています。

福島子ども健康プロジェクトは、今後も親子の生活と健康状態を定期的に記録し、広く社会に伝えるとともに、親子が健やかに生活できる環境を整えるのに必要な施策につなげていきたいと考えています。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

福島子ども健康プロジェクト